

滑 稽 文 庫

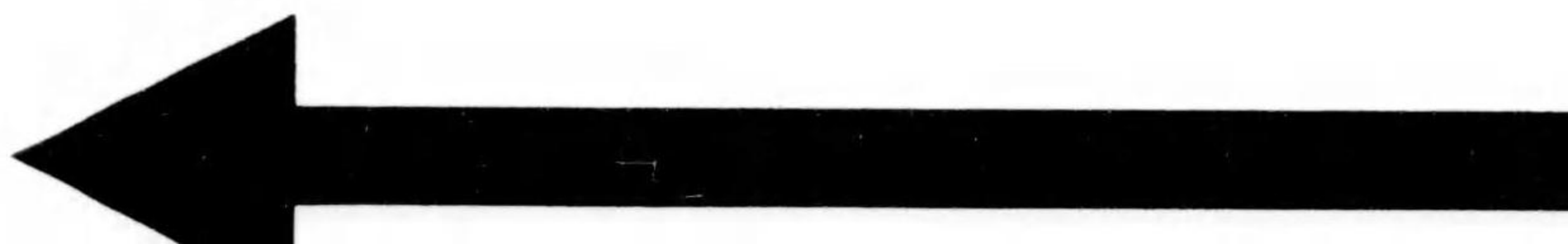
落 語 十 八 番



特

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始

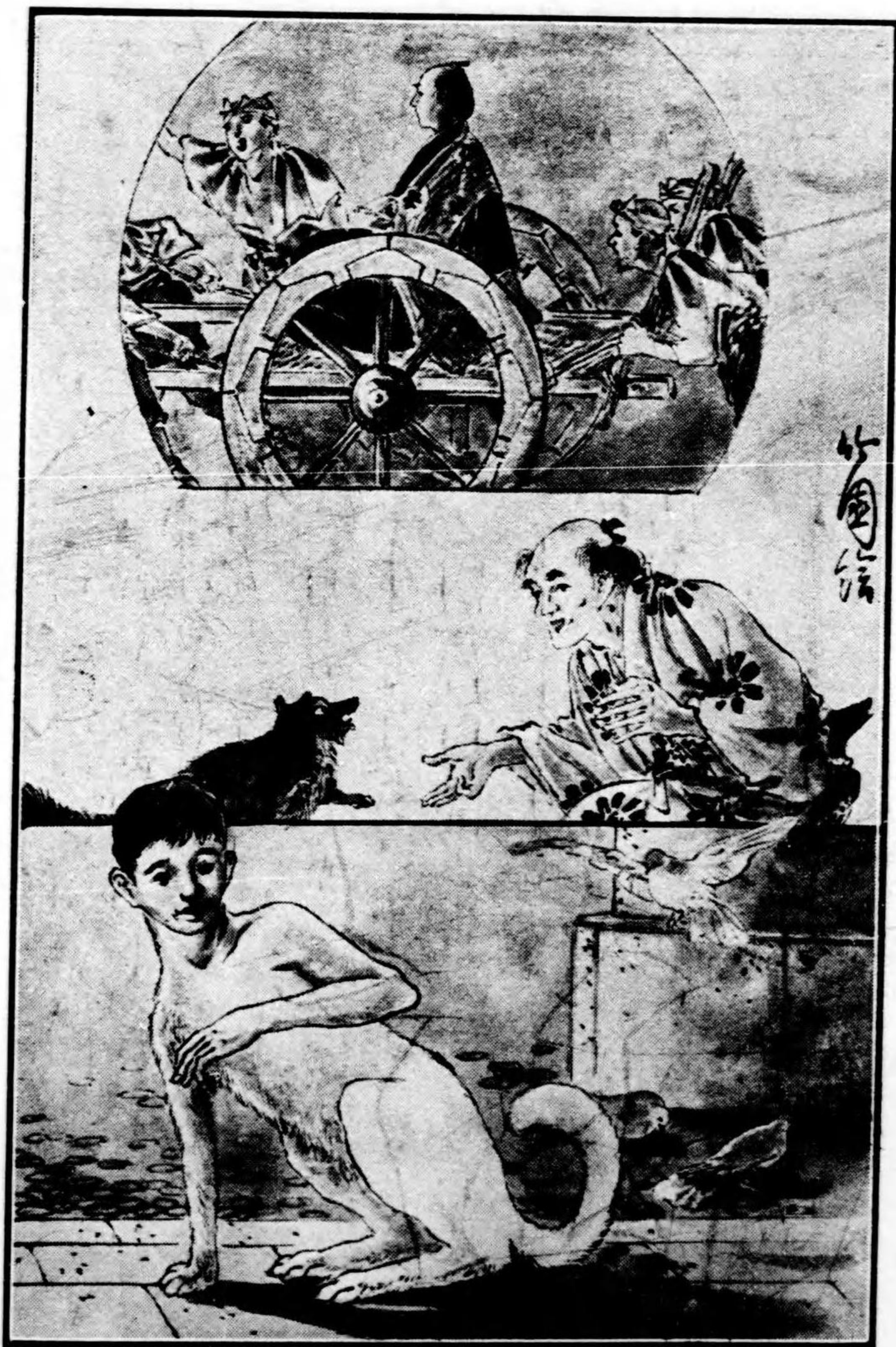


特 100  
291



八  
番





外國話

目次

◎ 難題話 <small>なんだいはな</small> し	.....	桂文治口演	.....	一
◎ 汽車の白浪 <small>きしゃのしらなみ</small>	.....	桂文治口演	.....	二六
◎ たぬき娘 <small>たぬめの</small>	.....	三遊亭圓左口演	.....	四九
◎ 養子と障子 <small>やうしとしょうじ</small>	.....	三遊亭金馬口演	.....	五九
◎ 一生の不作 <small>しやうのふさく</small>	.....	柳亭左樂口演	.....	八五
◎ 噺の講釋 <small>くまのかうしゃく</small>	.....	三遊亭金馬口演	.....	九七
◎ 寶船 <small>たからぶね</small>	.....	三遊亭圓左口演	.....	一二九

落語十八番

◎難題話し

桂文治 口演  
石原明倫 速記

エー今回(こんぐわい)は金馬(きんば)も圓左(えんざ)も眞面目(まじめ)の方(ほう)のお話(はな)して御機嫌(ごきげん)伺(うかが)ひましたから文(てま)治(ぢ)は馬鹿(ばか)々々(々々)しい話(はな)しを申(まを)しあげます、昔(むかし)の話(はな)しに、酔拂(よひら)ひが武士(ぶし)に突き當(つ)り悪口(あくこう)した處(ところ)から、侍(ざむらい)『無禮者(ぶれいもの)め』

と抜き打ち(ぬきうち)に切(き)ると、手(て)が鍛(た)えて居(ゐ)るのに、刃物(はもの)が良(い)いから、美事(みこと)に胴切(どうぎ)りにされました、武士(ぶし)は直(す)ぐに血汐(ちぢ)を拭(ぬぐ)つて、悠々(ゆうゆう)と行(い)つてしまひました、スル

◎初(はつ)の幟(ぼり)	桂文治(けいぶんぢ)口演(くわんげん)	一三
◎地獄(ぢごく)の學校(がくかう)	三遊亭金馬(さんゆうてい きんば)口演(くわんげん)	一四
◎幽霊(いうれい)車(ぐるま)	三遊亭圓左(さんゆうてい えんざ)口演(くわんげん)	一七
◎寫(しゃ)眞(しん)の指傷(ゆびきず)	三遊亭圓左(さんゆうてい えんざ)口演(くわんげん)	一九
◎多勢(たせい)に無勢(ぶせい)	三遊亭金馬(さんゆうてい きんば)口演(くわんげん)	二三
◎蘇生(そせい)	三遊亭圓左(さんゆうてい えんざ)口演(くわんげん)	二三

(をばり)

トこの處へ友達が通りかゝる、

甲『ナイ熊や……』

乙『何處で口を利くのだ……誰人だく……』

甲『此處だく』

乙『何んで其處で坐つて居るんだ』

甲『坐つて居るのぢやアねへ、今武士に悪態吐いて、胴切りにされたのだ

どうか家へ連れて行つて呉れ』

と云ひましたから、友達が駕籠で家へ連れて来て、醫者へ掛けて、手當をしたので、すつかり全快になつた處からして、

乙『斯うやつても置かれない』

といふので、友達か世話をして奉公に出しました、胴の方は湯屋の番臺、脚

の方は蒔蕪屋へ遣りましたが、不自由なものだから、朝湯に往く度毎に用を達してやります、

胴『お早う……今日脚の方へ言傳をして貰ひ申したうございます』

乙『何といつて行くのだい』

胴『目が霞んで不可ないから、何うか三里をすゐて呉れと、被仰つて下さいまし』

といふので、友達が湯屋から歸りに、蒔蕪屋へ行つて、

乙『八の脚が此方に在りますか、何處に居ります』

△『三番で仕事をして居ります』

其處へ行つて、

乙『ア、此處だく……、ナイ脚や』

脚『ハイ〜…………』

ア『何處で返辭をするのだ……………今日胴の方より言傳があつた、逆上て目が霞むから三里を點て呉れと云つた』

脚『有難うございす……………早速するませう……………又アノ胴の方へ貴公御出でなさる事がございしますか』

乙『毎日朝湯に行くから、何だか言傳をして遣らう』

脚『附う被仰つて下さいませ、餘り湯茶を呑んで呉れるな、小便が近くなつて困る』

随分馬鹿々々しい話してございませ……………また變挺な馬鹿々々しいのがございませ、

當今では三題話しが流行致しますが、昔日は難題噺しと云つて、御客

さまから難題を頂戴て拵らへたものもありません、此處に、

おほほしゆらのすけりうさかは、ふないくさ  
大星由良之助流沙川の船軍  
ありはらなりひらせいわは、も、よがよひ  
在原業平王母に百夜通  
なかむらしくわんから  
中村芝翫の漢土で芝居

と云ふ難題噺しでございませ、それを少々文治が取捨をいたしまして申し上げます、餘程馬鹿々々しいものでございませ、

雲州鹽谷の家老大星由良之助に向ひまして、諸士が、皆々扱は屋敷をお渡しあつたか、此上は直義の討手を引き受け討死せん』

由良『イヤ、今死すべき所にあらず』

と一先づ諸士を押し鎮めましたのは、思慮の深いわけで、とう／＼四十七人の者どもは、不俱戴天の主君の仇敵高師直を討んと、雲州を出立に及

びました、是れが當今でございませうなら、鎌倉へ参るのには、山陽鐵道から神戸へ着し、夫れからまた東海道線をズーと過ぎ、大船から横須賀線で、鎌倉へ達するのが、便利の順序でございませうが、五十三次をやつて参らねばなりません、人目を憚る浪人の身では餘程困難の處でございませう、處で、千崎彌五郎、原郷右衛門などは、頗ぶる道中の困難を述べ立てまして、

千『大星殿……如何でござる……、箇様に四十七人の者ども、打ち連れ東海道を下りましたらば、鎌倉方の者の目に觸れんは、必定、左有る時は是れまでの苦心は、みな水の泡、犬死いたしては、亡君へ對しての不忠は云ふまでもなく、竹田出雲へ對しましても、面目無次第でござる……、幸ひ討入万端の衣粧道具は、樂屋ナツト樂屋でいな

かつた、天川屋義平が請負ひましたものでございませうから、彼者に依頼で船を周旋いたさせ、それに打乗り堺の浦より出帆爲し、大廻しに鎌倉の七里が濱か、乃至は由井が濱へでも着する事と致さば、人目を避るに屈竟……、天川屋義平は男でござる、と依頼れた事を、後へ退め彼が俠氣、よも拒絶は致すまじ』

大『なるほど千崎氏それは善い策でござらう、原氏とも一緒に天川屋へ御取計ひが願ひたい』  
とこれから義平の周旋で、船が出来、堺の浦から纜を解きました、處が主君に別れ、浪々の身となる程の、薄幸な連中のことですから、まだ運が悪いと見えまして、船中で……、而も今少して相摸と云ふ、伊豆沖に於て俄然に難風吹き起り、山のやうな大浪がドーン／＼と打つて來た、



○「力彌さんのお屋敷はモウ此處かエ」

と云ふ可愛らしい小浪なら宜しうございませうが、亂暴な大浪がやつて参つたのには、力彌も驚きました、其處は何うしても由良之助は、流石に由良之助、沈着拂つて歌を咏みました、

大「由良の黨をわたす船人、楫を断え行方も知らぬ武士の道かな」

とこれを後世に至り定家卿が筆を加へて、由良の黨をわたす船人を由良の戸を渡る船人……、武士の道かなを戀の道かなトし、百人一首に入れたのださうでございませう……、これはチャアンと證據の有ることとでございませう、

雨窓幽話と云ふ書物にあると云ふことで併し、

△「曾根エなことは好忠方がよからう」

と被仰る方があるかも知れませんが、そればどうでも宜しうございませう、

却説由良之助を始め四十七士の乗つて居る船は、風と浪とに吹きたゞよはされまして南へくと、凡そ一兩年ばかりも、流されましたが、其處はまた忠臣義士を神佛も加護して、見殺しには成されません、餓死もせず沈没もせず致して、只有る山の麓へ揺り上げられました、四十七人の面々、得たり賢しと喜んで、海岸の巖へ飛び揚りますと、その刹那、船は微塵に碎けました、

大「ヤレくひどい目に逢つた……、然し一同恙なきは赤本の結局で、

めでたしく、時に先づ命拾ひはしたもので、此島は何と云ふ處か

知らん……、平右衛門、汝足輕ぢやから一つこの山を越えて人家が

有るか無いか探偵て来て呉れ」

と云つて居ると、山の上から齒抜屋の看板に、藁くわへて居るやうな老翁が

ひとり一人とぼくと下つてまゐつた……、由良之助は見るとより、地獄で佛と聲を掛け、

大「コレ、此處は何と申す處でございます」

老翁「此處がナ、此處は南天竺自陀樂山の麓ぢや」

大「左様なら此處は天竺でございますか」

老「如何にも天竺國である」

大「ハア驚きましたナ……名位あれを聞かれたか……とうとう、鹽

谷浪人も天竺浪人になつたナ……イヤ若し身どもは日本から漂流し

た者、處不案内と云ひ、第一空腹、何卒割烹店でも旅館でも……

一力の様な樽なら、猶結構でございますが、兎に角飲食の出来る町

へ出る道かござらば、教へて下さいませ」

老「夫れは氣の毒な事ぢや、この山の裾を三遍廻れば、流砂川といつてな  
大きな川が有る、それを向川岸へ渡れば、大明の食悦國と云ふて、料  
理屋の澤山有る處へ行かれるから、行かしやれ」

と云つてその老翁は彼方へ行つてしまひました、義士どもはこれに力を得  
て教への通り、參つて見ると、なるほど老翁の云ひごとく、流砂川へ出

た、日本で比べると、深雪が駒澤を追つて来た大井川を百四五十も一つにし  
阿部豊後守が乗り切つた、隅田川を二百も寄せた程の大川で、流石の義士も

船がないのでギョツと致しました、スルト川上から唐人大勢船に乗つて漕  
ぎ來り、四十七人を見るや否や、

唐「處に見なれぬ半坊主ども、残らず生捕り、カン／＼踊りして見世物にせ  
よ……、者どもぬがるなユウウレツチヨン、バア／＼」

と銘々得物を揮りまはし、此方を目かけて漕ぎ来る、  
 此方は難船で、空腹で堪らぬ所なれど、其處は武士は食はれど高楊枝といふ事もあり、卑怯に後退は致しません、由良之助が山鹿流の陣太鼓、  
 音『ドンドン』

と打ち出すや、四十六士の面々、かけや、半弓、槍、劍を以ちまして、戦ひ  
 ましたが、師直の館なら、少しは義士と戦ふた勇者もありませうが、素  
 より毛唐人を相手の事ですから、雑作はない、打ち勝ちてその乗つて居た安  
 計樂艦と云ふ船を分捕して、これに飛び乗り、

一同『日本帝 國萬歳アーイ……四十七士萬歳アーイ……』

と自ら戦捷を祝しまして、對岸へ着くや否や、空腹の上に軍で働きた  
 また萬歳くと叫んだので、腹ペコの大弱りだが、其處はどうしても武

士の事ですから我慢を致し、行くと間もなく食悦國へ達しました、此處に  
 は五層の料理店がある、これがいるのは牛屋なら、四十七人には縁故があつ  
 て面白いが、漢士の事なれば、この料理屋の名は「いろは」と云ふ筈もない、  
 何しろ肉専門の店、處へゾロくと這入り込んだのだから、下足  
 番も驚きましたらう、

下『入つしやいまし』

義士どもは、バタ／＼階子段を上つて行く、随分廣い樓上でも、叶ひ  
 ません、一時に這入り込んだ人数、一杯に詰め込んだ、キシ／＼詰め込む喃  
 阿と云ふことは、これから始まつた事かも知れませんが、唐婦人が直ぐに由  
 良之助の前へ料理の札を持って来た、由良之助が手に取つて見ると、妙でゲ  
 ス、鳳凰の旨煮、虎鍋、象汁など澤山ございますが、どうしても珍物はお高

い、この人数ではと由良之助の考へで、

大「チイ姐さん……豚で御酒……、而して御飯としよう」と命じた、

婦「豚で、御酒……御飯……お四十七人さアーン……」

通したとおもふと、間もなく其處へ並んだ、餓ゑに饑ゑて居る、浪人の事ゆゑ、皮相も外聞もございませぬ、飲むやら食ふやらで、赤垣源藏のことは、頼りに煽り付け、

赤「銚子のお代り……早く持つて来れるのか……」

バタ／＼手を拍す、小野寺十内は、  
小「赤垣氏、貧乏徳利の口から呑むよりは、また銚子は別でせうアハ……」

赤「アハ、貴殿の云はれる通り、久しく樽を湿さなかつた處へ、斯う來

ては、五臟六腑に染み渡る、どうも云へぬ味ひです」

銚子のお代り、牛肉のお代りの聲が、鯨波を揚げるやうな騒ぎ、四十七人の中にも六十以上の老人もある、堀部彌兵衛などは其方で、玉子が豆腐の料理の方が宜いのだが、漢土で爾うは行ん、豚を食つて居りましたが、機會に義齒かポタンと落ちた、昔の實盛は髪を染めた位で、討入の義士が齒を落したなど、云はれては、と其處は老人、思ひまして、人知らぬ間に取り上げそつと雪隠に行く振りをして、他處で口に飲めて、樓上へ歸り掛けに、隣室を見るときもなしに見ると、此は如何に、日本風の束帯した人が、火鉢を前に据ゑ、獨酌で微酔の躰、

彌「彼の人……是りヤア不思議ぢや……、安兵衛く……」

と養子の安兵衛を呼びました、安兵衛、

安「何事か」

と其處へ参りますと、小聲で、

彌「あれは足利……直義殿ではなからうか……」

と明鏡越しに視線を向けました、

安「阿父さん御戯談被仰いますナ、何でこの大明國へ來られますものか

……、貴老が平素、師直について、足利を狙つて入つしやいますもの

ですから、それで爾う御覧なのです……」

彌「イヤ油断は出來ん、四十七士の後を附け狙つて來られたのかも知れん」

と云ふから右も左と、安兵衛これを見届けますと、直義とはすつかり違ふ、

併し烏帽子直垂、裝束の躰、日本の公卿には相違ない、餘りの不思議ゆゑ、

坐に歸つてこの事を由良之助へ告げます、

大「夫は何しろ妙なことがあるものぢや……、では其處へ行つて名乗つて

見よう」

と先づ試みに襖の間を明けて覗きました、

大「なア一るほど、日本ぢや、ウム日本人に違ひない……それは好男ぢ

や……品の宜い……誰だらうな……何だか……見た事のある顔

ぢや」

それから由良之助、ノソリノソリと其席へ参りまして、

大「モシ卒爾ながら……貴卿は日本ぢやアございませんか……」

束帯の男、彼も不審さうな聲附で、シロリノソリと願ひ、

○「如何にも日本産れぢや、貴様も日本と見えるが、日本は何國等ぢや」

大「ハイ私しどもは、何をお隠し申しませう、雲州鹽谷家の浪人でござ  
います、敵師直を討んと、堺の浦から大廻りに鎌倉へ下ります道で  
難風に出遇ひまして、やう／＼此國まで参りました」

○「ハ、ア世には似た事もあるものぢや、鷹は在五中將業平ちやが……」  
大「ナニ業平さま……道理で好男子ぢやと思ひました……、最前から何  
でも見た事のある方ぢやと……、爾う／＼参河の八橋や隅田川の渡し  
場でも……、爾うでございました」

鷹「鷹をか」

大「左様でございます……、八橋隅田川ばかりでなく他所でもお見掛け申  
しました、アソレ一件……、貴郎様が、二條后を……、ソレ草  
に隠れて入つしやる處を……」

業「これは飛んだ處を……あれを見られては、耻しい、あの事は鷹が生  
涯の誤りぢや、漢土ではまだ誰も知らぬから……、静かにして呉れ  
……あの時を見たとは、閉口じや……」

大「アハ……ナニ繪で見たのでございますが……今回も矢張あんなうつ  
くしいのをお連れになつて、此國へ」

業「イヤ其様な粹な事でない、東下りの歸るさ、中村と……」

大「へい仲鷹……阿部様とですか、彼の方は漢土で三笠の山を出し月かも  
とお詠じなされた……」

業「仲鷹ではない、中村芝翫……俳優ぢや……彼奴は妙な事もあるも  
ので、蠶屋善吉夢の幕、縁故がある……、夫と出遇つたから……  
これは宜い同伴を得たと、これから同船して上る處が、遠江灘での

難風、とう／＼吹き流されて来たのが、漢土ぢや、日本への便知も時々あるといふ事ぢやから、氣長に待つて居るうち、芝翫は遊んで居るのは退屈ぢやと云ふて、芝居を打つて居る、途方もない大入……、狂言は忠臣藏で、淨瑠璃は芝翫の十八番の六歌仙ぢや、幸ひの事ぢやと云ふて勤められ、鷹が服装は手前物で業平を助けて居る……、貴様たちも心得の爲め見て去つしやれ』

大「ハ、ア忠臣藏と申し、六歌仙で貴卿の舞臺へ御出掛けになるのは見物したいものでございます』

業「マア何はともあれ、鷹が旅館へ来て滞留したが宜い』  
との仰せに義士ども大いに喜びまして、業平卿に従ひ、御旅館の食客となりましたが、四十七人の食客とは大變でございます、これまた芝

居の方で病人がある時などは、夫々本物の義士が助けを致します、殊に討入の場は一同が助ける事に致しますと、實物だから大喝采……、その評判と云ふものは大したもので、支武門へ原田十吉を使つて、大失敗をいたしました日本の新宮座とは大違ひでございます、業平卿は全株日本で、女狂ひをして随分浮名を流したお方だから、漢土へ来ても矢張同様、六歌仙の業平と評判高く婦人の最負が多く、毎晩芝居が打出すと直ぐに何處へか穴ツ這入りを致されます、或日の事で、

業「コリヤ、由良之助……、鷹は知る通り、日本でも女受けの宜い、鷹には打ち込んだ婦女が澤山あつた』

大「御のろけは恐れ入りました、何か御馳走を……」  
業「馳走もする、奢らうが……、漢土へ来て業平を勤めた處が、最負が

多くて、夫が沈魚落雁、閉月羞花、と云つてな、頗る美人がヤイノ  
 くを極るには、驚いた……、彼等の情を無にするも氣の毒である  
 から……、この色廻りは随分忙しい』

大『なるほど……、ではございませうが、俳優と婦人なぞと、新聞に書れ  
 ると不可せんから、お謹しみ遊すが宜しうございませう』

業『けれども、折角婦人の厚意を無下にするも、可哀想だからナア……

其處も考へればならぬから……、處で大概漢土の婦人はみんな鷹に

心を寄せて居るといふものぢやが、西王母といふ婦人ばかりは、貴卿芝

居が了たら、何處で御飯でも食べませうなぞと云はぬ、澄して居る……

斯う向ふが澄して居られると、之れを靡かせて見ようと云ふ氣になる、

で或日出遇たから、その西王母を口説いて見た處が、西王母が云ふに

は、日本の小野小町は、深草の少將に百夜通はしたとの事、貴卿も眞  
 實の心あるならば、妾が宿の桃の木のもとへ、百夜通ふて呉れ、と斯  
 う云ふのぢや、成程それも爾うぢやと、思ふたから、それから槍がふら  
 うが、火が降うが、構はずに通ひとほし、明日は百夜目、今宵は九十九  
 夜目ぢやが……、生憎今日は宿酔で、頭痛かしてどうも耐忍が出来  
 ない、貴様どうぞ鷹が装束つけて、この簗笠を着て、行つてたもらぬか  
 ほんの姿見せる斗りで宜いのぢや』

大『ハテめつそうな、假令姿ばかりでも、私しにはつとまりませぬ』

業『では力彌でも頼んで』

大『悴は未だ餘り若年過ぎます……斯うなされませ……、芝翫をおや

りなされませ、彼の人には、七變化をいたし、化の名人、既に貴卿の姿



にもなりました事がございます』

業『なるほど、では彼奴をたのまう』

と急に芝翫を呼び寄せ、右の次第をお依頼になると、

芝『これは近頃迷惑でございます、なんば私しが役者でも貴卿の名代はつとまり兼ねます』

業『貴公は化る名人じゃないか……』

芝『成るほど、舞臺では致した事もございますが……實地ではつとめ兼ねます……』

それに後に黒ン坊がついて呉れんと、物忘れ致して……臺詞が出来ません』

業『何も云ふ事は要らぬのじや』

強ての依頼に、愛嬌家業の俳優の事ですから、之れを引受けました』

芝『九十九夜……簑笠を着るとなれば、雪がなくては、引ッ立たない、然

ればと云つて、雪が……雪を急に降すと云ふ術もない、どうしたも

んだらう……好しく斯うしやう、道具方を頼んで、後脊から三角

の雪を降らせる事にしよう、綿も簑笠へ附ける事にして』

これから、道具方一人を頼みまして、名代の業平が、悠々と西王母の宿の

彼の桃の木のもとへ参りました、其處で西王母の侍女が、

侍『貴嬢……アレ業平さんが入つしやいました……』

との知らせに、西王母は、

『桃李言はず、春いくばくの年月を、送り迎へて三千歳に、なるてふ桃

の花のかほ「露に色香も十寸鏡、うつるふものは世の中の、人の心の

花ならぬ』

など、長唄なら云ふ處ですが……、そんな言も言はず、窓から窺と見て居りますと、何だかモシ／＼して立つて居る様子が、毎度の業平にしては妙でございます。

西「妙だワ、今宵の業平さんの躰裁は、何だか盆槍して入つしやるやうだネ」

侍女「爾うでございますヨ……、アレ御覽遊ばせ、妙じアございませんか否に白つぼくて業平でなうて癩病者ヲホ、、爾う／＼三角の紙を……額なら亡者でございますませうが、一面に三角の紙……綿でございますヨアノ笠や簀に附いてるのワ、ヲホ、、」

西「爾うサ……變だワ……一つ試して見やう……夜半にや君が獨り越ゆらん……夜半にや君が獨り越ゆらん……夜半にや君が……」

獨り越ゆらん……」

と聲を掛けましたが、眞の業平なら、自分の歌を云はれたなら直ぐに……風ふけば沖つ白浪立山と上の句を云ふのだが、其處は質物の悲しさにはどうとも云ひ續ぐ事ありません……これで、

芝「チ、失敗だ」

と面を食つて、化の皮を剥れぬうち、三十六計逃げるに如かすと、逃げ出すうとする、蓮ッ葉の侍女が、追ひ來り、

侍女「貴卿何んですネエ」

と後から手を掛けた途端に笠が脱れて落ちる、

侍女「チャ／＼業平さんでは無うて、貴君は成駒屋さんだワ、御戯談もんですネエ……シテマア此身本の紙や綿は、どうしたのですネエ……」

と云はれて、芝翫は大まじめに、  
芝『九十九夜の狂言もこれで大失敗、飛んだマア雪ちがひを致しました、

◎瀛車の白浪

桂文治 口演  
石原明倫 速記

先づ明けてお日出たうぞんじます、舊冬中は御最負をいたゞきまして  
有りがたい仕合せにござります、また相替りませす御愛顧のほど願ひます…  
…新年何かお新らしいお話しを出したいと心得まして、愚作ではござい  
ますが、瀛車の白浪といふ落し話しを新作しました…夫れを一席申し上げ  
ます…エー一夜明ければ一陽來復とか申しまして、其の昔しは正月

の元日、…今日は一月の一日と相成りました…正月時分は季  
候が大分ゆるんで参ります…梅も咲き、大層容子が宜しうござります…  
…今日の一月は寒に這入りまして、季候も寒うござります…寒うござ  
りますが、一月になりますと、…何か斯う、心が春らしくなりまし  
て、陽氣になります…皆な門松を立てます、年始かへりの人が、顔を  
赤くして歩行き…又たは勳章をプラ下げて、お馬車で参り、大層陽  
氣でござります…書間は陽氣でござりますが、一月は何うも、夜分にな  
るといふと、大層陰氣になります…モウ十時過ぎますと人出が無くな  
るくらゐでござります…丁度横濱の停車場で、最終汽車でございま  
す…ガラん／＼と鈴の音でござります、只今取り急いで参ったお方  
が、商人風の人でござります…青い切符を持ちまして、慌たしく二

等室に這入りました……其のうちに進行でございませう……気がついて見  
ますと、此の室に誰れもありません、

男「大層空虚てるなア」

ト思ひまして、隅を見ますると、婦人が一人をります……此の婦人の年格  
好は、貳拾四五にいたしまして、色白な鼻の高い、目もとに愛嬌があります  
……大丸鬚の、お形装は、上に吾妻外套を着てをりまして、下の容子は  
よく分りませんが、縮緬の紋付きのやうでございませう……羽織は黒縮緬  
らしい、帯は確かに繻珍でございませう……キラリと時計の鎖が、襷も  
とに見える……何う見ても奏任官ぐらゐな方の方の、奥さんに違ひない……  
……供はなし、只一人をりますのは、不思議でございませう、  
男「何うもお寒いこととございませうナ」

女「甚く寒じます」

男「和女さまは一人でございませうか」

女「ハイ……、今晚は大層汽車が人少てをります……何うも夜中、女一

人で淋しうございませう……、誰人かお出でになれば、宜いとぞんじて

をりました……、貴君さまが、お出で下さつたので、大層嬉しうご

ざいます」

男「夫りやア何うも……夜の汽車に、只た一人てへのは、何うも實に、不

用心でございませうからナ……先日も汽車で、大きな間ちがひが有つた

と申しますが、却つてまア、和女と兩人きりで、斯うお話しして行く方

が宜うございませう……他に否やな奴が乗つてるより、却つて此の方が

宜うございまして……和女さまは何でございませうか、東京へお出で

になりますか』

女『然やうでございます……今日横濱まで年頭に参りまして、遅いから泊ッて行けと申されましたが、宅でも待ッてるだらうとぞんじまして、取り急いで立ち歸ッて参りました』

男『ア、然やうですか……東京は何方でございます』

女『ハイ、本所でございます……、邊備な林町と申すところで……』

男『イエ、林町なら未だ口もとでございます……、手前は大阪でござ

います』

女『大阪は何方でございます』

男『船場でございます……、船場といふと廣うございしますが、淡路町といふところでございます……東京へ今度支店を出さうと心得て、

いま橘町へ普請をしてなります……モウ今月末には、開店をし

やうと思ッてゐるんでございます』

女『然やうでございますか……、只今何方にお出で、ございます』

男『普請の出来るまで、近所ではなくてはならんといふので……アノ兩國

の立花家といふ寄席がありますナ、彼の表の福井といふ、彼家に泊ッ

てなります、小林禮藏と申します……、雇人兩人置いてあります』

女『何御商法で入らッしやいます』

小『呉服ものをするつもりでございます、何うぞ又た御用を仰せつけられて

……』

女『然やうでございますか……御開店の際には、何か頂だきに参ります、……何うか又た林町邊へお出でになりましたら、手前宅へもお出で下

「さい」

小「是非何がひます……エー何でございませうか、旦那はんは、お宅にお出でございませうか」

女「イ、エ最う配偶は、無いのでございませう」

小「旦那はんは無ないので……無いてへのは虚言でせう」

女「イ、エ全く無いのでございませう……手前の配偶は、先達ての日清の戦争で、死亡なつたんでございませう」

小「ア、然やうですか……、ぢやア單人さんですナ……夫りやア御愁

傷さまでございませうナ……然れど何うも、名譽なことでございませう

……併し和女は、お淋しいこつてございませうア」

女「實に宅には、誰れもをりませんで……召し仕ひきりでございまして

……舍弟が横濱にをりまして、官についてをります……別に親戚も

ございませんし、誰れもをりませんから……直き分りますから、チト

何うかお遊びに入らしつて下さいまし」

ト種々話してをりませううちに、此の奥さんが……此の商人の顔を、

ザロリ〜と斯う見ます……見られるたんびに此の人が、アルツ〜と震

へませう……其の目つきが何とも言へない……愛嬌のある、俗に愛し目

と申しまして、斯う其の色氣を含んで、何うも氣の有りそなた按排でござい

ます……此の人も助倍でげすから、傍へ寄り、共に湯暖婆へ足を乗せまし

て、大層話しが親密ました……急行でございませうから、忽まちのうちに

品川へ参りまして、

「品川〜」

小「ハッ、最上品川へ参りました、早いもんでございますナ」  
 女「お話しをしてをりますと、忽ち参ります」  
 小「お歸りは、兩國まで御一緒に参りませう」  
 女「何うか、然う願ひます」

其のところへ、斯う最一人、這入つて来たものが有ります……ポンと向ふの隅へ腰をかけた……懐中から巻煙草を出して、吸んでをります……形装は二重廻しを着て、帽子を冠り、上眼をつかつて、奥さんの方を、眼を放さず斯う見てをる、其の眼もとに凄みがあり、何となく否やな奴でございます……彼の婦人は、此の人の舉動を見て、餘ほど驚ろいたやうでございます。

女「モシ、く、く」

小「何でげす」

女「只今向ふの隅に乗つてる人が、妾しの容子を見てをります」

小「然やうですか」

ト見ると、成るほど顔や何か、其の人が見るのぢやアない……姿の容子を頻りに見廻してをります、何うも盗賊らしい、

小「和女……賊です、彼りやア……汽車ア下りたら、氣をつけんければ可けません」

女「恐うございますが、何うしたら宜うございませう」

小「ぢやア斯うしませう……彼奴を先きへ出したらば、跡から出て、切符を渡すところ……皆な彼の横へ出ますから、此方は正面の口から、汐留の方へ参つて、彼處で人力車へ乗りませう」

女「然やうなら、何分よろしく願ひます」

『新橋く』

汽車が新橋へ着きますと、ドヤ／＼皆な下車ます……其の奴も先きへ出ました、跡から兩人が、危ないからといふんで、此の人が色氣がありますから……、奥さんの手を取つて、改札口から出まして、正面の方へズツと参り、

小「早く……」

といふので汐留の方へ、足早に兩人が参ります……ソコデ人力車を定めやうといふのでござりました……スルト様合の暗いところから、

○「一寸と待ちなさい」

ト婦人の袂を押へたものがあります、兩人の者が驚ろいて、此の者を見

ますると……、最前品川でもツて、相乗りになつた奴でござります」

女「モシ、何うか旦那、お助けなすツて下さい……否やな奴が出ましたから」

小「モシ／＼貴君、何をされるんです……此の暗いところで女子を掴まへて、

○「ウン、何も彼もない……、此の女にも少し用があるから、私が連れて行くんだ……、お前さん方の口を出すところぢやアないから、ズン／＼お出でなさい」

小「エー、然うでありません……私の此りやア縁者だす」

○「虚言をついちやア可ません……其んなことをいふと、却つてお前さんの身の上に関はりますから、ズン／＼お出でなさい……、サ、行かんかエ、行けく」



其の女の手を引いて、ズツと向ふへ引ツ立てます。

小『貴君、其のないな亂暴をこちやア可ん』

ト言ひながら、婦人を此方へ、取り戻さうとする機會、後ろから大きな奴が  
ふたありあら  
兩人現はれて、

○『邪魔をするナ』

ト小林の胸をドゥーンと突きました……、突かれました、ヒヨロ／＼ツと  
尻餅をつく、トタンに三人で、此の婦人をば連れて参りました、

小『世の中にやア、酷い奴もあるものぢや』

ト起きあがって小林さんが、跡追ひかけやうとしましたが、轉ぶ途端に腰を  
ば強たかに打ちまして、追ひかけることが出来ない、

小『アー痛いナ……アー酷い目に遇ふた……可哀さうに、何處へ彼奴

等が行ツたか……、追ツかけたたくツても、腰が痛くツて、追ツかける

ことが出来ん……詮方がない、災難ぢや……エ、跡へ歸らう』

ト歩行がうとしたが、腰が痛くツて歩行けません……然處へ人力車夫が参  
りました……、此の人力車へ乗ツて、兩國の旅宿へ立ち歸りました……

旅宿には、兩人雇人が待ツてをりましたが、遅いから心配してをりました  
然處へ旦那が歸ツて来たといふんで、喜んで、

○『大層お遅いから、心配してをりました』

小『何しろ腰が痛いから、モウ遅いけれど、藥種屋を起してナ……膏藥を  
買ふて来てくれ』

是れから一人が、膏藥を買ひに行きます、するうちに不圖氣が注いて、懷中  
を見ますると、懷中ものがない……紙幣が貳百圓這入ッてゐたんだ、吃

驚りして、

小「大變いことになつたなア……此りやア何ないにしたら宜エか」

△「貴君、何うかなさいましたか」

小「何うかにも斯うかにも、紙幣が紛失しまつた」

△「何處で、お失なさいました」

小「何處でといふても、此れには種々事情のあるこつた……最前新橋で

アノ厭やな奴が出くさつたが、彼奴に奪られたに違ひない……宜エい

夜が明けたらば、残らず此のことを、警察へ訴たへる……マア何なる

今夜ア寐やうよ」

他の者は何だか分りません、夫れなり褥につきました……其のうちに夜が

明ける、顔を洗ひ、飯を食べ、夫れから警察へ参らうと、支度をしてゐると

ころへ、女中が、

女「モシ旦那さま」

小「何ぢやエ」

女「貴君にお目にかゝりたいツて、尋ねて入らした方が、見世にをります

が、如何いたしませう」

小「何てへ人だエ」

女「お目にかゝれば分ると、仰しやいました」

小「然やうか……ぢやアマア、是れから警察へ、行かうと思つてゐるが

……、マア商法のことか、何だかしら……、ぢやあ其の人を此方

へお通しなさい……宜から喜六、茶の支度をして置け、只今誰人か來

るから」

然處へ這入ッて来た人を見ると、吃驚りいたしました……昨夜品川でもッて、汽車へ乗り込んで来た、婦人を連れてツた盗賊が、此處へ這入ッて来た……小林が驚ろいたの驚ろかないの、

小「盗人猛々しいッて、人の紙幣を奪ッて……此處へ何しに來やアがッた……喜六、モウ茶も何も入らん……其の鞆や何か、皆な片づける、何も出して置くナ」

○「ハイ、御免なさいまし」

小「ハア、お出でやす」

○「貴君は、小林禮藏さんといふお方ですナ」

小「ハア、然やうでげす」

○「貴君、私しを知ッてゐますか」

小「知らないで何うしませう……、實は昨夜のことを、警察へ訴たへやうと思ッてゐるところです」

○「然うですか……訴たへやうと仰しやるのは、昨夜の懷中もの紛失ですか」

小「然やうです……紙幣が貳百圓這入ッてをります」

○「夫れはねエ、此れでございませう」  
ト懷中から紙囊を出しまして、

○「サア、お語取んなさいまし……私しは是れをお届け申しに參ッたんだ、中を改ためて御覽なさい」

小「エ、……貴君が此れを持ッて來て……ハア……」  
驚ろいて改ためて見ますると、悉皆り紙幣があります、

小「此りやア、何ないになつたんぢやらう」

○「お前さんネエ、私を何だと思つてゐますエ」

小「何だと思ふつてつて……貴君賊でせう」

○「失敬なことを言ッちやア困る……僕、某警察の刑事です……實

はれエ、此のころ汽車賊で東京へ、チヨイ〜来る奴がある……夫

りやア婦人です……其んなものが東京へ來られては、僕等の職

掌 上 に關するから……早く捕縛しやうと心得て、昨日から張り

込んでゐました……スルト昨夜の最終汽車に、品川でもつて漸やく出

ツ會し……汐留でもつて拘引しやうと思ふと、お前さんが邪冤をする

で……其の事情をいふてゐると、遅くなるから……氣の毒だけれど

お前さんを突き倒して、警察へ連れてつて、調べて見ると……案のこ

とくれエ、お前さんのれエ、紙を疾うに奪てゐるんだ……餘まりお  
氣の毒だから、僕が中を改ためて見ると……名刺も這入つてゐるし  
種々な書付けもある……夫れを目的に、此方へ持つて來たんだ……  
此れからもあることです……婦人だからつて、氣をつけないと、飛  
んだことになる……お前さんは、餘ッほご女には、惚いやうだ……  
是れからも注意しないと可けない』

小「ヤ、モウ何うも、有りがたうございます……少とも知らんでをツた

アノ何ですか……美しく、彼ないな顔をして、彼れが賊ですか……

……人は分らんもんヤナ……貴君は刑事さん……何やなア、分らん

もんヤナア……私イ、貴君さんが、盜賊ぢやと思ふた……ハア何う

も……大きに有りがたうございます……喜六……菓子と茶を、此

ツちやへ持つて来い……お陰さまで助かりました……何れ又た、お謝禮には出ます』

○『ナアに……謝禮なぞに來なくツても宜うがす、決してお謝禮は受けません、是れからお氣を注げなさいまし』

小『アノ女子は、何といふ名です』

○『彼れはねエ……有名な賊です……今日は大阪、昨日は東京と、居

どころが定まらない、人綽號して、黒雲／＼と言ひます……彼れは黒

雲のお波といふので……』

小『エー、彼れが黒雲と言ひますか……道理で私が紙幣を、巻き上げやうとした』

◎たぬき娘

三遊亭圓左口演

石原明倫速記

寄席でも劇場でも同じこととござりまして、入があるなんかといふ、と看客が看客を見に行くだと申します……此れは然やうかも知れません……何處も這入るとも無いといふと、見たいといふのが情でございます、

○『何うだい此の明治座の演劇、延續に當りどほしだれエ……タガ此の高

島屋といふ人は、演ることが華やかだから、狂言が賑やかで、幕が早

いと來てゐるから、何うも毎でも一ばいだが、其の中で今日は兩人ざり

で斯うしてゐるは、實に吞氣で宜いれエ』

△『タガねエ、此いつもサ、女の子がチヨイと一まいぐらゐ有つても宜いれ

エ

○「女の子……女の子にもよりきりだ……別嬪は宜いが、龜ッ嬪は下さら

ないかられエ……四拾五年參拾六ヶ月などといふ婦人が、長アい赤

いお襦袢の袖を出して、妾ア何うも家橋が宜いんだなぞと、お何物

だれエ……マア何しろ此れッきりは嬉しいれエ

若「へエ、御退屈さまで……」

○「オイ何だい」

若「へエ……エー御婦人がお兩人でございませうが、甚はだ相濟みません

が……千ヨツとお割に願ひたうございませう……何うか今日のこと

ございませうから、是非何うか……」

△「可れへよ……ウ今日は其の積りなんギヤアねへか」

○「宜しい、僕が承知……サア彼の女なら連れて来たまへ」

△「安請合ひに請合ひ込んで、連れて来てからは斷われねへぜ」

○「女の子だから宜いつてことよ」

△「其の兩人てへなア別嬪かへ」

若「へエ、何でございませう……、嬢さまに女中衆とお兩人で、ナカク

別嬪で入らッしやいます」

△「ギヤア連れて来なさい」

若「嬢さん此方へ入らッしやい」

這入ッて参りました婦人を見ますと、年のころは拾八九といふのでございま

して、色白な瘦ぎすで、下脹れの、鼻筋の通ツた、眼もとの愛嬌な口もとの

甚小な、實に見とれるやうな婦人……頭髮は束髪、黒出の黄八丈の大き

な格子の衣類、濃い小納戸の純子の丸帯を締めてをります……、金のバチン留めが、是れがサ、殊によつたらガラハニ減金かと思ひますが、兩方の手に指輪を三つ箝めてをります……此の指輪も殊によつたら人造金ではないか、夫れとも矢ッ張り眞鍮のガラハニ減金ではないか、其處までは穿鑿が行届きません……、附いて参りました婦人は、年のころ貳拾四並、髪は大島田、衣物は紬の荒い縞柄、帯は黒縞子と藍氣鼠の縮緬の腹合せの帯、是れも十人並といふのでございませうが、何處ともなしに美いてへのサアないが、男好きのする顔でございませう』

○『嬢さま、前へ入らッしやい、前へ入らッしやい……、何所も同なじこッたが前へ入らッしやい』

女『嬢さま、御免蒙むッて前へお出あそばせ、貴君、甚はだ御無禮でございませう』

ますが、御免あそばして下さい』

○『オイ、最う少し小さくなれ』

△『此れより小さくなれエ』

○『全體肥満てるから仕やうがれエ』

△『生れつきだから、夫リヤア無理だ』

○『自宅へ身体ア、半分置いてくりヤア宜いに』

△『氣楽いふナ』

女『何うもお邪魔さま、妾しどもが参りまして……、嗚御窮屈で入らッしや

いませう、妾しのお臀が大きいもんですから』

○『何う仕つりまして……、嬢さま、如何さまで、一つ持ち合せまして

……失禮でございませうが、お一つ召し上りませ』

嬢『有りがたうございませうが、妾しは、少しも御酒が頂けません』

女『嬢さま、和女召し上れ……宜うございませう、召し上つたつて……何

でございませうよウ嬢さま……お自分のお屋敷では、年中お酒を飲む

方のお相手ばかり、始終氣をつめて入らつしやるから、少しは飲む方が

お薬だと、旦那さまに内密で毎晩御寝なるとき、お猪口に二つぐらゐ

上てるんですから少しは召し上るんです……ヨお猪口をお頂きあ

そばせ、和女が飲られなければ妾しが半分助けます……、然う言つた

つて、妾しも五勺上屋……貴君、嬢さまは大變高島屋最負です

から、何うぞ高島屋が出たら賞めて下さい』

○『賞るどころぢやアございません』

女『ホラ明きましたよ、御覽なさいませう』

○『何うも宜い俳優だ……私ア高島屋はさつぱりした、此んは宜い伊

優は有りません』

△『貴君、辨當が邪魔だ、食ツちまつたら宜からう』

○『ウム、食ツちまほう』

辨當を食ひながら』

○『高島屋ア……高島屋ア……』

ト慈姑を口の中へ入れまして、思はず吐き出しました』

○『エー、此りヤア何うも失禮いたしました高島屋ア……』

女『貴君、幕が閉りましたよ』

幕の閉るのも知らず、夢中になつて賞めました』

若『エーお退屈さま、お小用……』



女「若い衆が参りました、お嬢さまお小用……ハア……ハア……ハア……ハア……」

……ハア……、畏こまりました、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハア、ハア、然うですか多分……ハア……」

何ですかサツパリ分りません』

女「ヂヤア若い衆さん、嬢さまをお頼申します……嬢さま御免あそばせ、

不精きめます……貴君誠に今日は有りがたうございます、お蔭さまで樂々見物いたしました』

○「大きに失禮しました」

女「失禮どころか嬢さまが大變お喜びでございます……實は麻布狸

穴の月形様といふ大變富貴なお屋敷で、日清戦争に大變軍功の  
あつた方……嬢さま只だお一人ですから、何うも言ふ目が出るんで

ございます……妾しどもはお供同様に可愛がって頂たくんです……

……今日も明治座の閉場が遅いといふ評判だから、お前の家へ泊てく  
れると旦那さまがお頼み……妾しの家は本所龜澤町でございます

して、妾しに妹に母親と是れだけ、女きればかりでございますから、  
お前の家へ泊めて貰へば幾日あても安心だから、劇場が若し閉場が遅か

ツたら、お前の家へ泊めてくれと、眞實に有りがたい仰せ、お嬢さま  
のお供同様可愛がって頂かれます……實に嬢さまは此んな保養

をしたことは無い、演劇を見るより餘ッほど面白い……チヨイ……貴  
君がたが洒落を仰しやツて……モウお屋敷にお在あそばせば、酒のお

相手で然うでござるとか確つめらしいことばかりですから、嬢さまが大  
變にお喜び……就ては餘まり御無禮ではございますが、貴君がたを

御招待申したいが何處かへお連れ申すところは無いかと、仰しやるんで

ございませうが、妾しは此の邊は一向存じません、何處が宜いか、何うせ

御招待申すくらゐなら、貴君がたのお好きなものが宜いと存じますが、

何處か此の邊に思召しに適つた家はございませんでせうか』

○「何うも夫リヤア恐れ入ります……イ、エ何うも御招待なんて、却つて

手前の方で御無禮申し上げたんですから、手前の方で嬢さまを何處か

へ御招待申さなければならんで』

女「何ういたしまして……、何方かにございませんですかれエ』

○「然やうですナ、此の邊では……オイ何うだい、花屋敷の常磐屋へ行か

うかれエ』

△「花屋敷の常磐屋より何うだい……寧ろ反げて、濱町の筑紫へ行つて

鳥を喰はうヂヤアねへか……筑紫なら鳥だつて、御人體がお人柄が棄

られへ……會席で取扱かひは宜し、一寸と家も奇麗だしするから、

彼處へ行つて鳥を喰はう』

○「嬢さまが何ういふ』

女「貴君、嬢さまは何とも仰しやリアしませ……貴君がたを御招待申す

んですから、貴君がたの宜しい方が宜しいんです……何でも嬢さま

はお構ひなさらないんですから……』

○「ヂヤア然うしませう……併し演劇が閉場てからだてへとチト遅くなる

から、二幕残して行きます』

女「夫れなら宜しく何うぞ……然うなすつて下されば、嬢さまが何のくら

ぬお喜びなさるか知れません』

此れから二幕のこしまして彼の筑紫へ参りました、奥の坐敷へ通ります……  
頼りに彼の女が、ベラ／＼／＼／＼延續のお饒舌する、其のうち各個に酔  
が廻る……嬢さまは少し御酒を召しあがつたから、ホンノリ櫻色、海  
棠が露に打たれたかといふ、何とも云へない姿。

女「眞實に何うも妾しは、嬉しくツて堪らないんですよ……チヨイく  
貴君がたは、今夜は斯うなすツたら宜うございませう……嬢さまは  
何うせ妾しどもへお泊りでございませうから、皆さまも妾しの家へ入  
らツしやい氣兼ねるやうなものけ誰れもをりません……妾しの母に  
妹、呑氣な人でございますから、家は狭いし何うでございます、皆さん  
がゴチャ／＼に固まって寝る雑魚寝……宜いザヤアありませんか」  
○「ハ、何うでも宜しう願ひます」

女「れエ嬢さま……オヤ眞赤に氣まり悪がツて……チヨトと貴君、お  
時計は何時」

△「八時になります」

女「チヨイとお時計を拜見……オヤ宜いお時計、チヨイと拜見……嬢  
さま、此の方のお時計、宜いこと……チヨイと御覽あそばせ」

嬢「何れ……」

女「嬢さま、其の時計を預かつてお置きあそばせ……和女何ですよ……  
先刻斯ういふことです、アノ演劇が閉場から吉原へ行くと仰しや  
ツてるお約束のところを聞いたんですよ……デスから其の時計を嬢  
さま、預かつてお置きなさいませ、然うしないと此方お兩人に捨て、  
吉原へ行かれてしまひますよ……エ貴君嬢さまにお預けなさいま

しよ、妾し宅まで参ッてからお返し申します、ネ、夫れで宜いザアありませんか、サア最う一ぱい召しあがれ、妾しのお酌ザア御意に入リませんでせうが』

△『イヤ何うでも宜しうございます、エへ、へ、』

スツカリ辨呂遮になツちまつた、

女『嬢さまお小用……アラ踏跟けて入らッしやる、お危ない……常にな

いこと、此んなに召し上ツたことばないのれエ……アラ妾し踏跟けて……』

足元定まらず、お嬢さんにお附きの女が附いて厠へ行きます、

○『オイ』

△『何だい』

○『實に別嬪美くしい女だが、貴君アマア何方が宜いと思ふ』

△『夫リヤア一方は、品の宜い嬢さま然としたのだが、僕は少しお饒舌り

でも、アノ女中の方が宜い……チヨイとボチャくと丸くツて愛嬌があツて當時流行の丸ボチャ年増てへなア彼女ですれエ』

○『オイ是非泊れッてへが、何うしやう』

△『何うするッて、向ふへ越えりやア直ぐ龜澤町程近いから思案するにやア及ばれへ』

○『何うなるか知れれへが、先方も餘ッぽと洒落もんだ……ヅウしく泊り込まうザアねへか』

△『宜しい……オイ女中さん、お銚子を最う一本……夫れから今通した生肉は何うした』

女「ハイ……、アノ生肉は此處にお在なすツた女中衆が、チヨトと矢の倉まで行ッて來るんだけれど、直ぐに歸ッて來る……矢の倉の土産に持ッて行くんだから、奥へ持ッて行くのを間に合しておくれ、直ぐ入るんだ、手間が取れるやうでは困ると仰しやいましたから、此方へ持ッて參るのをお土産にお持ちになりました……然うして、アノ直に歸ッて來るつもりではあるけれども若し遅くなツたら、奥のお方に御支拂を願ッてくれと、斯う言ッて出てお出でなさいました」

○「オイ、戲談ヂヤアない、舉動が變だぜ」

△「然ういふ約束ヂヤアない……オイ女中さん、人間がぬなけりヤア、生肉ア其んなに入られエ、計書を持て來てくれ……何うも……エーオイ、支拂をして歸ッたヂヤアねへか……全體餘まり調子が宜すぎ

る、變だと思ツた……サア何うも大變だ、紙囊を抜かれた」

○「ナニ紙囊を抜かれた……此りヤア何うも驚ろいたれエ、呆れたれエ。……」

△「呆れたなんてッて……」

○「何うも馬鹿くしいれエ……全體貴君が悪いんだよ」

△「何故……」

○「女の子が一まいぐらゐあツても宜いなんで、貴君が助倍だから……」

此んな事と知ツたら寄せ付らんヂヤアなかつたものを……」

△「今さら愚痴をこぼしたッて追つかねへ、何うだい貴君、立替といてくれ  
たまへ」

○「宜しい、僕が支拂をして置かう……、サア大變だ、己れのもれエ」

△「お前も……呆れたなア此りやア何うも、行届いたもんだねエ」

○「ダガねエ私しが抜かれる、然うだ……先刻小用場へ行くとき、此處んところへ置て行ッて、小用場から歸ッて懷中へ入れたが、其の間だに抜かれたんだ」

△「然う言やア、時計も持ッて行かれた、情けねへ目に遭ふもんだ」

女「何うも誠ににお氣の毒さま……知れませんねエ旦那の前ですが……」

彼んな品行の宜い嬢様が……油断は出来ませんねエ」

○「オイ、其んなことを言ッてたッて詮方がねエ……巻紙と硯箱を貸してくれ」

女「ハイ畏こまりました」

巻紙へサラ／＼と書いて

○「番地が書いてあるから、人力車を一挺然う言ッて、車夫に此の手紙を持たして、直ぐに来るやうに、自宅の者を呼びに遣る、大急ぎだ」

女「畏こまりました」

○「ダガねエ、此の奴が金を持ッて来たたら、何うせ今夜ア自棄だから……三人で吉原へ行ッて、ドン／＼騒がうヂヤアねへか」

△「其んなことは宜しい、何うしたい使に行く人力車アやッて来たかい」

女「チヨイと旦那、今ねエ彼の女が引致られました、久松警察へ」

○「警察へ引致られた」

女「ハイ、何うも大變に悪ださうでございます……二人で同謀で始終彼んなことをして歩行き、人を魅して、罌丸引きてへ、彼の女は狸娘のおきんてへんださうでございます」

△「へエー……、道理で先刻八丈の衣服を着てゐると思ツた」

○「オイ、此の場合で洒落どこチヤアれエ」

女「デスけれど、お帳場から只今警察へ届かしてございますから、事  
によると本人が捕まッてゐるし……未だ何處へも散る氣づかひありま  
せんから、お金や品物は歸ッて来るでせうが、直に是れから送られるさ  
うでございます」

△「ハ、ア、狸娘だから、トウ／＼尻尻を出しやがッた。」



◎養子と障子

三遊亭金馬口演  
石原明倫速記

エー申し上げるお話しは、辛抱のために身が成り立ツたといふお話しでござります……何んでも人といふものは、堪忍といふことがなければ成らないといふ、先達でも説でございました……手前なぞは何も存じませんが。何がツて見ると、成るほど思ひます……堪忍とは堪へ忍と書くさうでございます、忍ふといふ文字は、刃といふ字の下へ心といふ字を書くさうです……心の上に刃のあるやうなものですから、六かしうございます……何ごとも忍ぶといふところにあるさうでございます……今日はお子さん方でも、昔と違ひまして、教育といふことが充分でございますから

爲され方が違ひます……以前は、金坊チヤンだの、太郎坊チヤンだのと申してをりました……今日になると幼少さいお子さまが、山田君だの、齋藤君だのと、君々と仰シやる……全で猫が、嚏をするやうなものでございませす、漸々變つて参ります……御成年のお方も漸々馬鹿なことをする人が無くなつて参りました、

○『オヤサアお上んなせい、能くお出でなすツた』

△『御無沙汰いたしました、』

○『今ねエ、貴君のお噂さを申してをツたところで、實に貴君は感心なお方だ、女房と賞めてゐたばかりです……お年は若し、マア容貌は宜し、近所の娘子供がワア／＼言ツて騒ぐけれど……夫れを見向きもしないで御辛抱なすツて、彼アやつて兄さんや何かの手助かりをなすツて……』

……浮いたところへは、お足も入れたことが無いといふのは、貴君のお年頃にヤア、實に珍らしい……オイ茶を入れて來ねエ……何うかお茶を一ばい飲ツて下さい、  
△『何うも有りがたうございませす、然う何うも仰しやられると面目次第もございません』

○『イヤ面目ないどころチヤアございません、貴君のやうな方はない……商人の忤さんで學問も出來、お年に似合はない御發明な……私しなぞは、貴君ぐらゐの時分てへものは、随分吉原へ精々と行き……藝妓も買ひ、放蕩も散々致、親父にも随分苦言を言はれたことが有りませ……貴君は又た何うも能く御辛抱なさる……夫れでなければ今日はいけません』



△「私わたくししげ今日こんにち參まつたなア、少々せうくお願ねがひ申ましたいことがあつて、出でましたんです」

○「何なんです改あらたまつて」

△「貴君あなたア何なんですナ、加藤喜左衛門かとうきざゑもんさんてへは、御懇意ごこんいでございますナ」

○「エー、彼かれアレエ、私わたくしの親父おやぢの時分じぶんから懇意こんいで、彼かれの人ひとにも大おほきに困こまり

ますよ………節儉しわいてへなアあるが、彼かれの人ひとは吝嗇りんしやくの方ほうだから困こまる………

…然けれどお古ふるいお馴染なじみですから………」

△「貴君あなた彼家かゝへ御養子ごやうしを、世話せわをしたことがありませんナ」

○「へエ實じつはれエ、兩人ふたりながらア一いやつて年としを老らつて、彼處あそこの家うちにも子こ供どももなし、眞まことの親戚みうちてへナないんです………私わたくししも氣きの毒どくに思おもつて、何どうか

してモウ年としが年としですから、子こ供どもを一人世話ひとりせわをしたいと、種々いろく説といたです

………幾いくら金かねが有あつたつて、死しねば皆みな他人たにんに取とられちまふ………養子やうしを貰もらつて自分じぶんの子こに、死しに水みづを取とつて貰もらつた方が宜よからうと、種々いろくと話はなしをしました………然さうして養子やうしを世話せわをしましたが、何どうしても養子やうしが、彼處あそこに辛抱しんぱうが出来できない………先まづ彼處あそこへ私わたくしの手てで世話せわをしたのも丁度ちやうど七人にんばかり有あります………一月ひとつきと辛抱しんぱうが出来できない、餘あまり不思議ふしぎだから容子ようすを聞きいて見みると………夫そりやア辛抱しんぱうの出来できない方が無む理りはないので、彼かれア何どうも食くひ物ものでも何なんでも碌ろくな物を食くはらない………朝あさから晩ばんまで我わがまい氣隨きずいなことを言いつて便つかひ廻ますんで………夫それで婆はらさんてへ者ものが馬鹿ばかに口喧くちやかましいと來きてゐるんです………飯めしを食くふにも、香物かうぶつで食くふてへのは、夫そりや幾いくらもありませんが、彼處あそこの家うちヂヤア、香物かうぶつも食くばれれエ………香物かうぶつを嘗かめて飯めしを食くはせるとへ、呆あきれけへつて物ものが言いはれれエ………

……茄子などは嘗めきつて、味氣のなくなつちまつたやつを、漸やく最後に夫れを食ふといふやうな有りさまだ……話しにやア絶えてゐます呆れけへつてモウお世話しません……死のことを知られへんだから困ツちまふ』

△「實は私しの宅は、兄も兩人をりまして、私しも何れ他へ出なけりヤア成らない身でございます……何うでげせう、彼處の家へ私しを一つ養子に世話をして下さいましナ』

○「お止しなさい夫りやア馬鹿／＼しいから、到底辛抱は出来ません……貴君などは評判の息子さんで、何處へだつて養子に行けます……貴君のやうな堅いお方が、世にあらうわけのものヂヤアない、お止しなさい……』

△「イエ、是非私しが行つて見たい……尋常なところへ養子に行くなア、私しは否やなんです……他人の辛抱の出来ないといふところへ行つてやつて見たいんです……夫りやア何んな人でも私しは説いて、其の人の心を和らかくして、何うか辛抱して、身を立つて見たいと思ふ考がへですから……何んな無理を言つても、舅公を私しは、スツカリ説いて見たいと思ふんです……失禮ながら彼のお方たちは、何にも知らないんですから、世の中のことやなんぞ残らず話して、スツカリ工合よくして見たいと、私しは思ふんです……是非何うかお世話を願ひたいもので……』

○「然うですか……オイ、只今お前、話を聞いてゐたらう……此の捨次郎さんが、彼處の家の六かしやを知つて、好んで養子に行きたい

てへんだが、何うしたもんだらう」

×「然うですれエ……貴君のことは、毎でも我夫と申してゐるんです……  
今時のお若い方には似合はない、御辛抱家の何うも……毎でも我夫  
と賞めてゐるんです……女狂ひをなさらないし、彼んなところへお  
出でなすツたツて、詰りやアしません、夫れより他家へお世話を申しま  
せう」

△「イエお女儀さん、私しは強て行ツて見たいです」

○「然うですか、然う貴君が仰しやるなら宜しいです……一つ行ツて話し  
をして見ませう」

爰で此の人も世話好きですから、先方へ參ツて此の話しをしますると、何う  
か貰ひたいといふ……此方の親父さんに話しをしまして、彌よ吉日を撰み

まして、養子に參ることになりました……參ツて種々と舅について行ツ  
て見ましたが、話しより甚い……殿ましの殿ましくないのツて、延續に  
叱言ばかり言ツてゐる……何でも叱言の國から、叱言の新發明に來たや  
うだ……叱言の固まりを捻ツて、朝から晩まで投げて歩行いてゐるといふ  
恐ろしい爺さんだ……婆さん口喧ましいし、實に辛抱が致きれません……  
素より夫れを承知で參つたんですから、種々兩親に説いて見ても、  
些とも分らない……何うにも斯うにも、三月ばかり辛抱して見たが、モウ  
辛抱が出來きれません……彌々明日は出て行かうかと思ツたが又考がへて  
捨「アノくらゐ斷言して來だんだから、今さら面目なくツて、出て行くわけ  
には行かず、何うしたものだらう」  
ト考がへてをりました、スルと

父『オイ、捨次郎や』

捨『御用でございますか』

父『何うも漸々寒くなつて来て、障子が毀れて来たが……此處へ篋る

障子を一枚、襖と買つて来て貰ひたいもんだ』

捨『成るほど、此處のところに障子がないと、お寒うございませう……で

は買つて参りませう』

父『慈悲古いのより、新しい方が廉價いだらうから、廉價さうなやつを直

切つて、買つて来てくれねエ』

捨『宜しうございます』

是れから捨次郎が障子一枚襖と買つて参りました……篋て見たが家が古

いから、何うやつても篋りません』

捨『何うしたんだらう、何うも篋りませんナ』

父『ペラ棒め、敷居と鴨居があつて、篋られへことが有るもんか』

捨『家が曲つてゐるから篋りませんのでせう』

父『曲つてたつて、何うかして篋て見る』

捨『困つたナア』

父『篋らんでへことが有るもんぢやアねエ』

捨『ヨ、宜しうございます……何うかしますせう』

此れから鉋を持って参ります、鋸を持って参ります……素人細工に

下を削つたり、又ば上を切つて見、種々いたしまして漸やくのことで篋りま

した、

捨『如何ですネ』

父「オ、く、此いつは宜い、此いつは宜い……スツカリ箆ツた」  
大層喜こびました、此處のうちへ來まして喜こばれたのは初めてでございます……其の時に不圖氣がついた、

捨「ハ、ア此れた、今まで己れが悪かつた……何うか舅兩人の心をなほして、己れも辛抱しやうと思つて、先方を矯正さうといふのが此方の誤解だ……舅は家に附いた敷居と鴨居、養子は此の障子と襖だ……此方を改めて事を運べば、必らず斯うシツクリ箆る……先方には構はれエ、己れを削り或ひは切り、障子と襖になつて、一つ辛抱をして見やう」

ト此れから何ごとも自分を矯めて、障子と襖になつて兩親に仕へました……スルト不思議に彼の嚴ましい兩親も、漸次く心に心ろが解けまして、

大層親子中が睦まじう相成りました……ソコデ此の身代をトウく譲りうけることに相成りました……兩親も安心をいたして、昔とはスツカリ矯りまして、近所の評判も宜く、

「何うして彼んな吝嗇な人が、如彼いふことに成つたらう、全たく今度來た養子の、捨次郎といふ人の致かたが宜いんだらう」

ト大層評判が宜く相成りました。年は二十五で男振は美し、近所の娘子供なぞが、家の前を往つたり來たりして、否やらしい動作ぶりをいたしますが、其んなことは些とも目にかけません……相替らず兩親の氣に適當ことをしては、勤めてをります、

○『今日は』

捨「ヤ、サアお上んなさい」

○『御無沙汰をしました』

「捨」何うして私しこそ御無沙汰をいたしました、サア何うぞ是れへ」

○『時にねエ、貴君には感心したよ……丁度今年で三年以前、お前さんを此處の家へ周旋をするとき、種々と私しが見て、お止なさいお止なさいと言ったのを……お前さんが強てといふので、據どころなくお周旋をして、長くつて、一月も辛抱が出来るかと思ひました……然う思ひましたら何うです、トウく斯ういふことまでに、辛抱をなすつたから感心だ……然處で何うです、女房を、両親に話しをして迎へたら宜いでせう……何日まで一人であるわけにも行きますまい、貴君のそこへ來たいと言つて、私んところまで頼みに來た者も幾人もある……宜いのお媒妁いたしませう』

捨『イエ、私しは未だ女房を貰ひません、未だ早うございます』

○『何うも堅いネ、貴君は……何うしても貴君は、一人であるんですか……ヂヤアお媒妁は止ませう……時に種々なお話しをするやうだが何うして此んな嚴ましい舅をば、生れ替つたやうに爲すつたてへのは全たく貴君の力だが、何うして此んなになすつたんです』

捨『ナニ、實は貴君ですがらお話ししますが……此處の家に三月ばかりおりましたが、到底辛抱が出来ないから、貴君のところで出て參らうと考がへました……時に此處、箆つてる障子と襖がございます、是れを私しが買つて來て、箆らないやつを、漸やく上を切り、下を削りまして此のごとくに箆めました……其の時に不圖考がへが起りました、トいふのは、夫れまでは両親の心を何うか矯正してあげたいと思つて、

種々説いて見ましたが、夫れは了簡ちがひだつたんです……兩親は家についた敷居鴨居だ、養子は新らしい障子と襖だ……といふ考がへが起つて……自分を削り或ひは切りして、箆つて見やうと、心を變て辛抱をしました……其の結果、舅の心が案外に改り、私しは此處まで辛抱をしました……私しは障子と襖に成りとげて、今日まで辛抱したんでございます』

○『ア！然うですか貴君は障子と襖ですか、道理で娘子供が貴君をばりたがります』

◎一生の不作

柳亭左楽口演  
吉田欽一速記

エー……相變りませす一席お饒舌を致します、毎度ながらお白くなつて居りますが、暫時の間お目を拜借いたします……つまり此の當節はみな何から何まで進んで居りますが、其の内にも劇場なぞは種々又改良くと云ふので、お目新らしいものをば諸君方へ御覽に入れる事で有りますが、何うもこの昔話と云ふものは御存知の通り、誠にお古いのを専門として成る丈けお笑ひの有る様な事を一席申しますが、つまり此の何う考へて見ても此色情と云ふ者は去り難ないと云ふ事を毎度申しますが、今日左樂が遣りませすお話しと云ふものは、女房の悪いのは一世の不作と云ふお

話した一席お饒舌致しますが、詰りこの御亭主が甘いと申しますが、甘いと言つて丸つきりに馬鹿では何區何町何番地何の某と標札と云ふものが張れる者では有りません、所謂スコ甘いと云ふので、砂糖にしますと西洋砂糖で、御亭主が何んなに甘う御座いましたも、つまり御妻君がお利口で家事の取締りが宜しいと、馬鹿な亭主も利口に見えます……又御亭主がどんなに目から鼻へ抜ける様なお利口で御出遊ばしても、家事不取締りで御妻君に不始末でも御座いますと、其女房の悪いが爲めに、利口な御亭主が馬鹿に見えるると云ふ事が御座いますが、随分世の中に無いともし限りませんが、このお話しも聞き様取り様では大變な間違ひが成りますが、頭を柱へ打付けましても

○『大當り……』

と申しますと縁起が宜う御度いませぬが只

△『痛い……』

と泣きつ面を致しますれば不吉で御座います……何でも悪事千里のたとへで、悪い事は一時は智恵で隠しても、かくしきれずに露顯し易い者で御座います。

女『只今開けます……只今開けますよ……』

○『オイ……開けれへか……』

女『ランプが消えて舞仕つたので有りますから……只今開けますよ……』

サア……オイ……起きなくちやア不可ません……起きなくち

やア不可ませんよ……只今開けますよ、マッチが知れ無いので有ります

すから……歸つて来たのだからサ……アラ何をクルクル廻つて居



るのだよ……着物を着るのだよ……サー……アラ……夫リヤア  
 わたしきもの  
 私の着物だよサー……アレ……ハッ口へ頭が出たよ、頓鼻禪を……  
 ……見つともないよ……何故柱へ上るのだよ、屋根へ抜けられやアしない  
 ……只今開けますよサー……臺所へ行つちやア不可ないよ……  
 ……水口の方へ行つて……宜いかい』  
 ホン……と突き出しました

男「サー……痛へく……何うも酷い目にあつた何んだい是りやア……  
 ……まー驚いたく、今夜は御亭主が歸らないから泊りに来いと云ふか  
 ら、遊びに行つて酒を飲んで、ヤレ嬉しやと帯を解く、親指が歸つて来  
 やがつた……イヤ……驚いた何んだいこの有様は、けれども考  
 へて見ると是れは大難が小難なのだから……乃公が掴つた日には

大變だへ……有り難いく、だから何うも悪い事は出来ないよ、先  
 づ家へ歸つて寝る事と仕様オー……君子は危きに近よらず……  
 酷い目に會つた、悪いことは出来無い、額から血が出て痛へく、帯で  
 も締め直してウーン………巡査は来やしなからウーン……オヤ……  
 ……サー仕舞つたぞ紙入が見え無いがハテナ……家を出て行く時に  
 紙入を手拭へ包んでヒヨイ……とサー……仕舞つたく向ふへお上  
 んなきいと云ふので上ると膳が出る酒を飲んで帯を解くヒヨイ……と  
 着物を脱ぐ時にアー……然う、乃公布團の下へ紙入を入れたのをサ  
 ……大變だ乃公が幾等逃げたつて紙入が向ふの手に這入つた日には  
 輕罪裁判にあつても證據不充分とは不可無いぞ、紙入だから書附け  
 が這入つて居るし、彼んな金物は類の無い物だ、裏座が餅で表が鮭

の頭が附いて居るが、袋物屋が濫いから買つて置き、濫いから買つて置  
 けと言つたが、濫いには違へぬいや、鮭の頭に鮓が附いて居るの  
 だから、彼れが亭主の手に這入つた日になつて見ると……」  
 悪い事をして居りますから當人家へ歸つたが寢られませんな、横になつて  
 見たり坐つたり、坐つて見たり横になつて見たり、八十六度と云ふのだから  
 草臥ましたらう……すると夜明になつて鳥はカア／＼と啼く刻限になり  
 ました、

男「向ふから來ないところを見ると、亭主の手に紙入が這入ら無いのだが、  
 乃公が飯でも食つて居ると亭主が紙入を持つて刑事が附いて……内か  
 ……と來た日には先づ姦通の科で少くとも三年は食ふな、是りや逃  
 亡仕様……待てよ逃亡するのにも構はないけれども、亭主に紙入が判

然這入つたとすれば宜いけれども、亭主に紙入が這入つて居無いとすれ  
 ば田舎へ行くのも詰らないな……是りやア圖々しく向ふへ行つて見様  
 向ふの様子を見て亭主と妻君が恐い顔して家がゴタ／＼して居る様なれ  
 ば夕べの事が知れたのだから密らすに家の雑作夜具布團から目星い物を  
 パツタに賣つて、夫れを路金に田舎へ行かう、亭主と妻君が莞爾々々と  
 お取膳で飯を食つて居る様なれば、向ふへ這入つて紙入の探案をして遣  
 らう……」

酷い野郎で御座います度胸をすゑて立ち出でました、  
 男「ハ、……彼所だ驚いたな……夕べの様子は何なだらう……」  
 と家の前を行つたり來たり眺めて居りますと、  
 主「お絹や……お絹や……」

女「ハイ……………」

主「彼の向ふで内を覗き込んで、彼方プラ／＼此方プラ／＼歩いて居るのは本屋の龜さんぢやア有りませんか……………」

女「ハイ……………アラ然うですよ……………」

主「然うだなお茶をお入れよ……………お茶を入れるのだよ」

女「ハイ畏まりましたよ……………」

主「龜さんや……………」

男「ハ……………仕舞つたア……………目付つて仕舞つたか仕様が無いや、何う

なる者が打かつて見様、乃公が悪いのだから……………」

と諦めたが格子を開けて内へノコ／＼這入つて来た。

男「お！う御座い……………」

主「龜さん何うしたい、舉動が可笑いちやア無いが、氣を付けなさいよ、時

候が悪いから何うかしたのか……………」

男「へエ……………何うも只今迄色々御厄介になりましたが、實は東京を

三年か五年計り……………旦那居られ無い事が出来ましたから、お暇乞ひ旁

々に上りましたので御座いますがお早う……………」

主「確かりしなさいよ、斯んな結構な東京を三年か五年駈落ちする……………」

龜さん失禮な事を言ふが逆か泥棒ぢやア有るまいな……………」

男「夫れが泥棒に近いので御座います……………」

主「泥棒の方に近い……………ア……………分つたよお前が様子が宜いや、服装の

拵へが旨くつて言ふ事が枯れて居るから、此ん畜生間男か……………」

男「へエ……………お早……………」

主「何だ……然うかい……」

男「實は間男なので……」

主「間男は止しなさへよ、間男をすると先の亭主に對して極く罪になるから止しなさい、だが先の亭主に知れたのか……」

男「へエ……だか何うだかと云ふので……」

主「何だい夫れば……」

男「平常私が我子の様に可愛がられて居ります恩人の奥さんと、悪い事をしましたのです……」

主「夫は能くねへや、龜さん人面獸心と云ふのだよ……能く無へや……」

男「今夜は御亭主が留守だから泊りに來いと云ふので先方へ参りましたので……」

……」

主「其奴は旨く遣つたな……ウーン……」

男「御酒を飲んで帯を解いて横にならうと云ふところへ、その御亭主が歸つて來たのです……」

主「危いな……擱つたか……」

男「其所は旨く水口から逃げて仕舞つたので……」

主「旨く遣つたな……蛇の口を免れたのだよ旨く遣つた……」

男「逃げた事は逃げたので有りますが、布團の下へ紙入を忘れて來たので御座います……」

主「フーン……」

男「其紙入を御亭主が知つて居りますが、その紙入が御亭主の手に這入つ

た日には、恩人の御妻君で御座いますが間男をしたので有りますから、東京を三年でも五年でも駈け落を仕様と思つて参りましたので……」

女「ほんとうに龜さん膽を潰すよ……間男をしたのだらう……出来るよ……様子が宜いから出来るよ……向ふへ行つたのだらうお酒を飲んで、其所で寝たところへ御亭主が歸つて来たのだね……夫れから水口から逃げて仕舞つたのだらう、眞實に旨く遣つて仕舞つたね……逃けた事は逃げたが布團の下へ紙入れを忘れて置いて来たのだね、夫れが御亭主の手に這入った日には、悪い事をしたのだから、一も二も無く田舎へ三年なり五年逃亡仕様と言ふのだね……眞實に意氣地が無いよ、考へて御覽な、間男を仕様、姦通を仕様と云ふ御妻君、其處に如才が有るものかれ、其紙入を御亭主に渡しや……渡しや仕ないよ、夫りや御

亭主に知れ無い様に御妻君が判然と仕舞つて有るよ……」

男「フーン」

女「れへお前さん……」

主「然うともく……然うだとも是りやれ是の云ふ通りだよ……よしんば布團の下に有たつても、どうだい間男をされやうと云ふ亭主だらう、フーン氣が附くものかれ……」

といふやうな馬鹿くしい事由でございます、

◎噺講釋

三遊亭金馬口演

石原明倫速記

エー一席山し上げます、虚偽といふことは大層悪い、盜賊の初まりだとい

ふことを申します……私わたくしの考かんがへには、虚偽うそが無いと大きおほに困こまるだらうと思おもひます……眞實まことばかりだと容子ようすの悪わるいことがござります……世よの中なかは見渡みわたしたところが虚偽うそばかりのやうで、過般いっぴやも伯知先生はくちせんせいが、虚偽うその世よの中なかと穿なッてお出だしになりましたが、成なるほど彼あの如ごとくで……甚はなだしくたると、虚偽うそと虚偽うそが鉢合はちあせをするやうなことがある……眞實まことは親公おやこさんが子こを思おもふといふ、御親子ごしんしの間あひだぐらゐなものでございませう……然けれど虚偽うそも名なが異かはると大層たいそうなものでござります……寺院方てらがたの方はうでは方便はうべんと申ます、軍人社会ぐんじんしやくわいの方はうでは、智謀計略ちぼうけいりやく、傾城けいせいの手練手管てれんてくだ、商人あきんどの元直もろこねかざり、皆みなな虚偽うそでござります……此これが無いと大きおほに困こまります……商あきなひをしますにも、

○『此こりヤア最もう實じつに元直もろこねが切きれまする』

客きやくの方はうでも、

客きやく『お負おまけな、毎いっでもお前まへんとこで買かふのだから……』

此こりヤア買かッたことなの無ない人ひとで、此これが客きやくの虚偽うそでござります……スルト商人あきんどの方はうでも、

商あきんど『損そんがいくんですが、負まけて置おきまする』

買かふ人ひとが大層たいそう宜いい心こころ持もちで、廉價やすいものを買かッたと思おもひます……然けれどギリ／＼元帳もとちゆうを調しらべて見みると、餘よほど儲まうかッてをるんでござります……正しやう直ちきなのが宜いいと申まして、是これを眞實まことにやッたらば、工合ぐあひが悪わるいんで、

商あきんど『宜よろしうござります、負まけときます……此こりヤア元直もろこねが何程いくらで、何程利いくら益かッてをります』

ト客きやくの前まへで言いッたらば、誰だれも買かふ者ものはござりません……是これが商賣しやうばい

の氣轉で、

商人の損と元直で土藏を建て

てへことが言ッてございます……、又た喧嘩があつたとき、調停人といふ者が、彼れば妙なもんでございます……、眞實の事を言ッたら、決して納まりが付くもんぢやアございませぬ、猛りたッて怒ッてるところへ行ッて、

○『お前さんの言ふことは御尤ともで、先方が悪いのでございませぬ……、先方でもッて濟まないから、何うか謝ると申してをりますから、勘辨してやッて下さいませし』

斯う申しますると、

△『先方でもッて謝るなら、私の方でも勘辨させう』

ト爰で調停人が相手の方へ参りまして、同じやうなことを申します。

○『先方でも謝ると申しましたから、勘辨して下さい』

斯う虚偽を吐いて物を纏めるんでございませぬ……、シテ見ますると、虚偽は必用なもんで、虚偽といふ文字は、人扁に爲といふ字を書いて偽と讀ませます……、人の爲めに虚偽を吐くとか、夫れに世辭といふことがある、此れがないと人と交際が出来ませぬ……、心にも無いことを言ふのでございませぬから、虚偽といふ者は妙なもので、言はれた人が悪い、心がしない、眞實をいふと喧嘩を致さなければ成りませぬ……、何うしても世辭がないと困る者で、其の内にも藝人なぞは、尙更ら世辭は必用でございませぬ……、お客さまへ對しましても、世辭の宜い藝人は、餘計御虫負にあづかります……、手前なぞは世辭がございませぬから、大層損でございませぬ……、御虫負のお客さまが』

○『お前だつて藝人ぢやアないか、少しお世辭を言つたら宜からう』  
能くお叱言を申されます、夫れは性質で何うも致方がございませぬ……  
年分の内には餘ほどの損がございます……是れは某講釋師の先生が、世辭がないために定連に憎まれました』

○『餘まり彼奴ア大面すぎるぢやアねへか、癩に障るぢやアねへか……然うく、彼んな嫌な奴はねエ……己れが此の間途中で會つた時、藝人に世辭は入れエけれど、面ア見て知つてゐるから……先生、只今お出掛けかれエ、斯ういふと、オヤ御定連さまですかと、頭を上へ上やツがツた……返答をするに、低るのが當然だ、勃起しやアがツた頭を……馬鹿にしてゐやアがらア……』

△『ウム手前の話しが出るから、己れも言ふけれど、彼奴ぢやア極癩に障

ツたことがある……此間の晩退風だから、講釋を聞きに行つた眼いから前でトロリと眠たんだ……スルト中賣の奴が己れを起して、お茶をお飲んなせいと持つて來た、其の茶を己れが飲んで眼を摩つて見ると、マア聞いてくんねエ彼奴の言ぐさを……高座の前で寐てゐる客がある、講釋が讀みにくい、夫れほど眠きヤア、自宅へ行つて寐てゐたら宜からう……斯う言やアがツたから、他の客が己れの面ア見るぢやアねへか、餘まり馬鹿にしてゐやアがらア』

○『癩に障るれエ、町内の若へ者を掴めやアがツて、其んなことを言やアがるてへことはねエ、彼奴打ツちまエ』

△『馬鹿ア言へ、藝人を打ツたつて致方がねエ』  
○『タガなア餘まり腹が立つから、彼奴が講釋の讀めれエやうに、皆で



妨害をして遣らふザヤアれエか』

△『其いつア宜からう』

○『何ういふことをしたら宜からう』

△『己れの考げへにヤア、皆な高坐の前へ行ッて……落語家と違ッて、前に机があるから、分りやアしれエ……講釋を読み出して肝腎なところ、胡椒の粉を買ッて持ッて……下でもッて、四五人揃ッて仰ぎあげてやらうザヤアれへか……然うしたら上で、息を出したり引たりしてゐるから、屹と胡椒の粉が、眼か口か鼻か、何ッかへ這入るだらう……胡椒が這入ッチャア堪られエ、ヒリ／＼して、咽て嚏が出て、講釋が讀めれエ……其の中に講釋を間違へる、ソコデ以て己れが高坐の前へ立ッて……先生、お前講釋は大層上手へが、己れが

此の間、晩、寐てゐて聞いて、濟まれへことをした……斯ういふ上手へ講釋ア聞いてゐられれエ、己ア歸る、斯う言ッて己れが立つんだ……跡から四五人揃ッて立ッたら、其の晩の講釋は無茶苦茶だ……大人氣れエやうだが、然うして意趣を返してやらうと思ふが、何うだらう』

○『其いつア宜からう、今夜皆な揃ッて、出かけやザヤれへか』

爰で皆な胡椒を持ちまして、夜分になりますると講釋へ參りました……ソコデ皆な高坐の前へ、ズツと陣を取りました……スルト前席の殻板が濟みまして、二席目が濟み、替ッて先生出ました……又た講談の方は落語と違ひまして、貼扇といふものがありました、バタ／＼擲きます……大層権識を取りまして、容子の宜いもんでございます……最初は大きな聲は出

「しません……小音にいたして、お客さまを漸々前の方へ引き寄せて、夫れから少々、聲を張り上げます……先ず湯呑へお湯を注いで一口飲みまして、ボン／＼と二つ三つ貼扇を擲き、札の上へ低頭をいたしまして、講「エー、偕て毎夜の御最負さまで、有りがたい仕合せでございます……申し續きましたる三席を辨じましてお暇を頂戴します……後坐に伺ひつゞきに相成りましたるは、柳澤彌太郎出世のお話し……美濃守において、大坂表へ乗り込みに相成り、淀屋辰五郎欠所に相成ります……彌天下二つに分れるといふんで、井伊掃部頭出頭におよばれるといふ、大騒動のお物語り……中坐の元和三勇、戸田勝光入道青殿の一子戸田新八郎、今一人は田宮左金吾時忠といへる、田宮流小太刀の達人、夫れに石川紋彌勝實、此の三人が辛苦をいたし

て、福島の家老福島正を警敵と狙ふといふお物語り……前講は徳川四戦記のうち味方ヶ原のお戦ひ、内藤三左衛門三十六段の斥候といふをお聴きに達します」  
 爰で湯を一口ゴツクリ飲んで貼扇をたいき立て、  
 講「時は何日なんぬり、元龜三壬申年十月十四日、武田晴信入道信玄、其の勢三万五千餘人を引率して甲府を雷發におよび、遠州相模郡の城主天野宮内左衛門景連、蘆田下野守、此の兩人を案内者とし、先手山縣三郎兵衛昌景に五千餘騎をさし添へて、同國飯田、多々羅の兩城へ攻めかゝる……其の勢ほひ破竹のごとく、名にあふ甲陽名代の山縣なれば、短兵急に攻め立てられ、兩城忽ち落城におよんだり……夫れより信玄は兵を進め、徳川家のお味方

久野三左衛門家能が籠りたる久野の城を攻め落さんと、十重二十重におツ取り圍み……厳しく攻め立つるといへども、三左衛門素より智勇の良將なれば、防戦の手配り行き届き、殊に要害宜く、なか／＼急に落城すべくも見えず……是れによつて當城へは押への兵をのこし置き、夫れより在々諸所を亂暴し、農家町家を焼き立て、山名郡木原、西島、袋井驛より姫子山の麓へ連綿として屯を張る……此の趣き土地の人民は言ふまでもなく、エイトウ／＼／＼濱松へ、追々遠見の早馬をもつて、急を告ぐることに櫛の齒を挽くがごとく、注「甲陽の信玄殿に大軍を率し出張つかまつり、其の勢ほひ當りがたく候らふ」

ト注進におよぶ……此の時家康公御櫓に登りたまひ、小手をか

ざして遙かに御覽あるに、黒烟り炎々と立ち昇り、民の苦しき目もあてられぬ現處なり、

家「イヨウ、憎くき武田勢が舉動かな、片時も捨ておきがたし」

ト急ぎ櫓を下りたまひ、俄かに諸將を召して、

家「出陣の用意／＼」

ト仰せらる酒井石川の面々言葉を揃へ、

酒「御詮御尤ともに候らへども、敵は目にあまる大軍、味方少勢にして、此れに當らんこと思ひも寄らず……先アづ暫らく御出陣をお止まりあつて、早々織田家へ御加勢をお頼みあそばされ、御籠城こそ然るべう存じ奉まつる」

トお諫め申しあげる……公憤然と御怒りあつて、

家「ヤア言ひ甲斐なき者どもかな、我が領分を亂暴され、何ぞヤミ／＼籠城いたすべきや……凡そ領主たるものは、民と共に苦しむ民と共に樂しむが天道なり……臆病者は籠城せよ、心ある者は我が供せよ」

とツカ／＼とお支關へお進みあつて、

家「舍人、馬牽けッ」

舍「ハッ」

ト牽き來る御乗馬にひらりと打ち乗り、

家「心ある者は我れに續けッ」

ト只だ一騎がけに御出馬ある、其の御軍装は鐸木の御鎧、銀にて鍔形、金の青龍の前立物打ッたる金の六十四間の筋兜、白檀みが

きの小手脇當、赤銅づくり貞示の御太刀、藤四郎吉光の短刀を帶し朝霞と名づけたる駿足には、金覆輪の鞍を置き、金唐艸の押し當、紅白紫三段の厚總をかけ、唐草象眼の達燈、七五三簾の鞭を上げトツ／＼と乗り出したまふ、

（「スワ君の御出馬」）

ト續いて大久保七郎左衛門忠世、同治右衛門忠佐、本多平八郎忠勝、内藤三左衛門信成、平岩七之助親吉等御跡に従がひ大天龍小天龍の兩河を打ち渡り揉みにもんで進まれたり、

此の際家康公の思し召しは、信支は三万餘の大軍、味方に僅かの小勢にて、迎も敵ひがたきは御存知なれども、猶豫あつては彌々信支勢ほひに乘すべし、敵に弱みを見せまじと、且は味方の勇氣を引き立て

内「ハ、畏こまり奉まつる」  
 ト御前を離れ乗り出す、信成其の日の軍装を見てあれば、萌黄糸おどしの大鎧、草摺長に一着なし、同じ糸五枚鍔、銀の獅嚙の前立打ツたる兜には、八幡座より鍔まで白熊の毛をサツと振り亂し……猩々緋に糸糸をもつて下り藤の定紋を縫ひあらはしたる陣羽織を、肩に取ツて投げかけ……三尺二寸鐵づくり、備前の住祐定の陣刀を結び下げ、一尺七寸の打太刀十文字に佩び……鴻の霜降り羽をもつて矧たる尖り矢を、森のごとく脊負ひ、村重藤の弓の眞ツ只中を力皮に納め……連錢蘆毛村雲と名けたる八寸に餘れる駿足には、銀覆輪の鞍おいて、押し當尻がい紅白二段の厚總すかけ、梅花七輪すかしの達燈、脊の撓むほどに打ち跨がり……紺と白とのダンダ

ため、斯くお乗り出しに相成ツたのだ、  
 此の時内藤三左衛門信成は、一散に馳せ抜けて君の御馬前に立ち塞がり、轡に取り縋ツて、

内「恐れながら申し上げたてまつる、君既に大斥候として御出馬とは申しながら、敵は古老の信玄、今大軍を率ゐる發向のところ、従がひ奉まつるお味方の人數は、餘り小勢に候らへば、此のまゝ御進みは如何と存し候らふ……依て暫らく此の處に御馬を止めさせたまひ、跡勢の續くを御待ちあるやう願ひたてまつる、其の間に吾儕、敵陣の動辭を見届け、御注進申し上げん」  
 公御聞あツて、

家「尤ともなり、然らば爾、見届けて立ち歸れ」

ラの手綱を掻い繰り、平一散に乗り出だすよと見えたるが、宛然ら颯風のおこるがごとく、電光の劇するに異ならず……砂煙り混くと立ち昇り一天を覆ひ、蹄の音トウ／＼として、瞬たくうちに拾八町を片手綱に繰り上げ／＼真ツ平地に進む……土地は名にあふ袋井、折りしも吹き来る姫子山の向ひ風に、兜の白熊はザ／＼と逆立ちあがり、内兜より見出だす眼け爛々として、明星のごとく、鬼か人かと疑がはる……三左衛門信成は一言坂の絶頂にトウ／＼と乗り上げ、馬の四足を踏み留め、眉庇に小手をかざして、遙かに姫子山の麓に備へたる武田の陣頭眺むれば、二千一組或ひは一千、八百、五百、三百人、此處彼處八方四面に屯るして、其の勢凡そ三萬五六千、魚鱗、蓮翼、長蛇形、虎頭、圓月、箕手形、鉾矢、鷹行、一文字、

真丸、一行、モガリ落し、扱ては八門通甲に、備へかためし有りさまは、兜の星を輝やかし、鎧の袖を揺り合せ……弓、鐵砲、鎗、薙刀、鉾、太刀等の得物／＼を飾り立て……鎧は各々好みに任せ、黄糸、赤糸、逆澤瀉、紺糸、黒糸、桶皮胴、萌黄匂ひ、淺黄糸、白糸、青糸、ダンダラ落し、紅白二段、紫、蘇枋、雨色、錆色、翁形、胴丸、赤皮、五色糸、市松、飛白、黒白おどし、毛糸の数は限りなし……定紋ついたる旗の手は、皆な真ツ先きに押し立てたり……先づ第一陣を見てあれば、赤地に金糸をもつて正八幡大武神と現はしたる旗、へんぼんと吹き靡かせ、赤地に白く桔梗の紋を染め抜いたる旗一ト流れ、銀の二股大根狸々緋二段馬連の馬印を押し立て、旗下なる大將は、赤糸銅貫の鎧、同じ毛五枚しころ、金の對鉞打ッた

る桃形に、金の狂ひ獅子の前立うツたる兜を猪首に着なし、猩々緋に黒糸をもツて、武田菱を蛇腹に縫ツたる陣羽織を着し、燃え立つばかりの軍装にて、赤銅づくりの太刀を佩き、金唐革の采配取ツて床机にかゝり控えたり……續く同勢三千餘人、雑卒にいたるまで總て茜木綿の陣羽織、袖に一文字の合印ついたるは、是れなん甲陽名代の赤備へ、遠江國三橋の城主六萬石、山縣三郎兵衛昌景なり……夫れより右の方少し離れて、白地に黒く大山道段々の旗一ト流れ、銀の十六葉の枝菊に、金の大短冊拾八枚ついたる馬印は、一層花やかに押し立つたる下に、白糸おどし銀割小實の鎧、同じ毛五枚じころ、銀獅子頭の兜を眞甲に押し頂だき、白銀づくりの太刀を結び下げ、白羅紗の陣羽織、銀切り割りの采配を携さへ大床几にかゝりたり

續く同勢三千餘人、兵卒にいたるまで白木綿の陣羽織、袖に二の字の合印、此れぞ源三位兵庫頭頼政入道雷圓の後胤、甲陽にて智者の聞えある、信州旗の島の城主七萬石、馬場美濃守信房なり……此のとき高坐の前の、例の客は耳打ちをし始めました、

○『オイ遣らうぞ』

△『宜からう、遣ツつけやう』

○『ソロく、煽いでやれ、煽いでやれ……』

一人が號令をかけますると、下においた胡椒をば、各自片手に掴みまして片手に扇をもツて、高坐を目がけて扇ぎ上げました……先生其んなことは夢にも知りませんから、彌よ調子に乗ツて、講第三の目の備へは、黒地に白く四ツ石燈みの紋ついたる旗一ト流れ、銀

の九曜えうの星ほし、金の輪違わらがひ、狸りやう々々緋一段馬連だんざれんの馬印うまじるしを押おし立て……  
 其その下したに黒糸くろいとおどしの大鏡おほよろひ、同じ毛五枚けまいしころ、金の向むかひ兎うさぎの前立まへたて  
 うツたる兜かぶとを猪首みくびに着きなし、威わげ物ものづくり太刀たちを横よこたへ、黒くろ(ハクシ  
 ヲウー)……羅紗らしゃの陣羽織ぢんはおり(ハクシヨウー)……黒唐革くろからかはの采配さいはいは  
 (ハクシヨウー)……腰こしなる鉄くわに(ハクシヨウー)……なさめ(ハク  
 シヨウー)……鷺わしの(ハクシヨウー)……風かぜ(ハクシヨウー)……切り  
 羽は(ハクシヨウー)……なもつて(ハクシヨウー)……(ハクシヨウー)  
 ……(ハクシヨウー)……變へんでございませす(クシヨウー)……是これでは(ハ  
 クシヨウー)……迎むかへ(ハクシヨウー)……講釋かうしやくは(ハクシヨウー)……  
 ……讀よめません(ハクシヨウー)……誠まことにお氣きの毒どくさまです(ハク

シヨウー)……今晩こんばんは是これで御免ごめんを蒙かぶります……お氣きの毒どくさまで  
 ございませす、明晩みやうばんお聽きなほしを願ねがひますこいで……  
 トいふてへと、前まへの客きやく人じんがズツと起たちまして、  
 (何なにを言いふんだ、クシヤンくく、嚏くさめをしやアがツて、頭あたまへ唾つばが飛はね  
 た、問ま拔ぬけめ……明日あした聽きなほせつたツて、己おらア川があツて來こられね  
 へんだ……今夜こんや何方どつちかの戦いくさ争さの勝しやう負ぶをつける』  
 講しやう負ぶはつけれません、他わからコシヤウが這はい入いつたやうでございませす。

寶船

三遊亭圓左口演 石原明倫速記

お目出めでたい話はなしを一せ席ま申まし上げませす、エー



「心だに誠との道にかなひなば祈らずとも神や守らん」  
いふ歌がございます、

「己れば正直で、不正いことをしないから、祈らなくつても神様は守つてくれる」

ト申します、其の信の心といふは、大層其の意味があるものでございませ……信心とは、信の心と書く申します……マ、信といふ文字は人扁に言といふ字を書いて、其の下へ心といふ字を書いて、信心と讀ませる……此れは何かといふと、神さまへ參つて、決して偽わりをいふものはない……心にありだけのことより申さんので、其處をもつて信の心と申しますさうで……デ、此の人に施與をいたしますのに、  
「彼の人か、大層零落てゐるから、何うか救つてやらう……就ては兄

さんが確實だから、彼の人を救つて置けば、本人から歸らないまでも、兄さんの方から己れを打捨て置くまい」

ト然ういふ精神では、信の心ではないので、

「何うか難儀なものが有つたら、助けて救つて遣りたい」

謂ゆる大和魂といふのでございませう……デ、此の水害の際に、彼方の山が崩れたとか、或ひは川が止つたとかいふときに、彼方でも、此方でも、

「助け船ヤア……助け船ヤア……」

トいふ聲は、實に何うも憫れなものでございませう……其の際に、

「ヤア、家が流れて来た、面白い……」

「ヤア、人間が流れて来た、面白い……」

ト指を指して笑つてゐるものは、無いものでございませう……

『どうか彼れを助けてやりたい』

トいふ、此れが眞實の眞心といふのでございませう……、デ、跡で、此方では演藝をして義捐金を募るとか、ヤ、

『區役所へ斯ういふことにして、何程か納めやう』

などといふ、其の惠與金といふものは、誠に結構でございませう……、デ、積善の家には餘慶ありと申します……、此れは然やうかも知れませんテ、

爺「婆さんや……マア、此れまで難儀なものといふてへと、助けてやりま

したが、マアお影と、今日は財産もなくなり……、田地畑もなし……

又た衣類もなし……、金は一文もなし……、誠に何うも樂な身の上にな

りましたなア……』

波「眞實でございませう……、モウ今までは……、お金が澤山ありますてへ

と、盜賊でも這入ッて来て、奪られると可けないからと、戸締りを嚴重にして……、此處のところも鐵の格子を篋めて、二重に締りをしなければ不可ない……、錠も是れでは不可ないから、何うか工風して決して破られないやうにと、其んな心配もしましたが、お金がないと……、モウ其んな苦勞がありません』

爺「眞實だノカ」

婆「夫れに、衣類が澤山ありますてへと、先達では此の衣類を着てツたから

今日は正可に此の形装でも行けない……、黒の紋つき……、夫れぢやア

きまりすぎるから風通にしようか……、ヤ、夫リヤア華美だから、結城

紬……、夫れより八丈が宜いとか……、一々マア心配ですけれども……

……マア其の苦勞が無くなりましたから、誠に何うも仕合せです』

爺「眞實だノウ……殊に奉公人も大勢あると……ツヒ骨を折ッてくれる者には、夫れだけに目をかけて、盡力料をやる……スルト他の者が猜忌んで……旦那は彼奴にばかり肩を入れて、私を些とも構ッて下さらねへと怨む……此の方にも氣兼ねをする……マア其の苦勞もな  
い……誠に安樂世界とは此のことだ」

婆「眞實に然うでございますよ、誠に樂な身の上になりました」

爺「何うも安心だナ……」

○「御免下さいまし」

爺「ハイ、誰人でございます」

○「アノ福徳屋萬兵衛さんと仰しやるは、此方さまでございますか」

爺「ヘエ、福徳屋萬兵衛は私しでございますが、貴君は何れからお出で」

「ございます」

○「是れは初めまして……エー手前は、萬年屋龜吉と申します者で……」

旦那さまが、大の御慈善家といふことを承たまはりまして、一度は御尊

顔を得……手前のやうな曲ツた了簡の者も……一度でも旦那さまに

お結交になつて置いたらば……少しは了簡かたも回復らうかと、お結

交に参りました」

萬「夫れは何うも、恐れ入ります……ア、何うぞ此方へ」

龜「エー就きまして……何か手土産と存じましたが、別に斯うと思ひつき

の品もございませんし、旁々いたしますから……是れへ持参いたしま

した、繪圖面に畫いてございます、麴町の高臺の地所が一萬坪ほどご

ざいます……旦那さまはお年を老て入らッしやいますから……彼ア

いふ空氣の流通の宜いところに、お住居あそばしましたら……御長  
壽をなさいませうかと、其の繪圖面を持参いたしました……此の地所  
を何うか、御受納下さいまし』

萬『誠に有りがたうございますが、只今家内と申してをります通り……  
私しはモウ金がございますゆゑ、其んな結構なお地所を頂戴しました  
ところが、致しかたがございませぬ……家を立てることが出来ませぬ  
……平に御免を蒙ります、思召しだけは有りがたうございますが  
此れは御辭退申します』

龜『マ、何うか……折角持参いたしましたもの、夫れでは困ります、何う  
か御受納下さいまし』

萬『夫れは困ります……金がないから家を建てられません……マサカ原

中に坐つてゐるわけにも行きません』

△『エー御免なせへ』

婆『ハイ、誰人でございます』

△『エ、私しやア、大工の福と申す、大福てへもんでございます……福徳

屏萬兵衛さんてへなア、此方でございますか』

萬『ハイ、福徳屏萬兵衛は私しだが、何ぞ御用で……』

福『實は旦那さまア、大の慈善家てへことを承たまはりやして……何うも  
實に旦那さまのやうな、お心もちの方に交際で頂戴したら……私し  
のやうな曲つた了簡も、回復らふかと、お結交に出ました……就ては  
私しから、何ぞ土産を……ところで、何にも思ひつきの品がねへんで  
ございます、ア、私が此のあひだ、材木を多分と買ひ込んだんだが、置

きどころがねへんで困ッてゐるんですから、旦那に願ッて……是非旦那に家を建てさしてお貰ひ申してへもんでございます

萬「誠とに有りがたうございますが、夫れはマア家を建るわけに行きません」

福「何故です」

萬「何故ッて、私しは只今金がない」

福「戯談言ッチャア可ない……戯談言ッチャア可ない……此方から頼むんでございますから、決して金を貰はうなんてへ心持ちアありません……然處で、私しどもの職人が、棟梁工事を爲しとくんれエ……」

……工事はねへかれエ……、ナニ私しどもア、手間を貰ひてへッてへわけぢやアねエ……斯うやッて遊んでゐると、腕が鈍る……何うか是非工事を請負てくんれエ、辨當もッて通ふ、無料で宜いといふ……」

夫れでも可ねへと斷わるわけにも行かす……然處でもッて旦那さまに是非家を建てさして頂だきてへんでござへます……へ、何でございま

す……ハア、麴町で地所が一萬坪……其いつは素晴らしい……旦那然ういふ結構な御地面があるからッて、其んなに大したお廣い住店も

入りますめへが、先づネ支關が三疊、其の次ぎが八疊、六疊……、

夫れから十疊の室が一室あッて……デ、マア、二階家にして、チヨツと臺所が三間に五間……お土藏が、此れは是非無くツちやあ成らな

い……マア離座敷が、十二疊が一間、四疊半のお圍ひ、お書齋……」

何しる明日ッから、工事に着手りませう」

萬「戯談言ッちやあ可ません……其んなことを言ッたッて、大工さんばかりで、家が出来るもんぢやありません……家根職も頼まなくツち

「あならず、壁職も頼まなくツちやあならず……何うも困る」

□「エー御免なさい」

萬「ハイ、お出でなさい、誰人で」

□「私しア、千年屋鶴吉てへ家根職でございます……此方の旦那ア、大の御慈悲善家と承たまはりまして……何うか然ういふお方にお目にかいて置いてへと、お結交にあがりました……就きまして私しに、工事をさして頂きたいもんでございます……エ、オヤ／＼……其いつは是非れエ……旦那私しに是非何うか、家根を爲して頂きたうございます」

×「エー御免なさい」

萬「ハイ、誰人……」

×「私しは壁職……」

△「私しは疊職……」

「忽まの間に家が出来ました、疊職が来て、経師職が来て襖が貼れる、建具職が戸障子を飾る、忽まち立派な家が出来ました、

萬「婆さんや……何うも寄って集って、此んな大かい家を建築てくれたッて……只た兩人きりで、淋しくって可れエ」

婆「眞實でございますねエ……」

◎「此方でございますませう……御免下さい」

婆「ハイ、お出でなさい、誰人さまでございますか」

◎「福德屋萬兵衛さんは、此方さまでございますか」

萬「ハイ、福德屋萬兵衛は、手前でございます」

◎「私しの親どもが然う申しました……旦那さまは、大の御慈悲善家に入らつしやるから、お前のやうな曲つた了簡の者も、セメテ三年置いて頂いたら、少しは了簡も矯正らうからと、斯う言はれましてございませうから……何うか三年の間、御奉公をさして頂きたいと、願ひにあげりました……私しどもの母も親父も、然う申して……旦那さまの傍へ、切て三年も置いて頂ければ、屹と矯正ると斯う言はれたんでございませうから、是非何うか置いて頂きたうございませう」

▲「我等が國でも、親たちが然う言つたんでがすから、是非飯焚さんでも置いて下さへまし」

草「お前さん方、其んなことを言つてお出でなすつたつて……私しどもは金もなし……給金をあげることも出来なければ、食はせることも出来

ない」

◎「エー何うも、恐れ入ります……素より手前は、お給金を頂だかうなるといふ存じ寄りではございませう……甚はだ御無禮でございませうが、御不自由のないやう……日々のお小遣ひは、お差支ありませんが、親どもより送つてさし上げましてもよろしい……と申しました……ア、私どもの母も親父も然う申して……お夫婦さまはお年を老して入らつしやるから……衣類や何か宅から、マア旦那さまに差し上げても宜しいと斯う申しました」

▲「へエ、我等が國でも、田地畑ア澤山持つてるだから……月に米の二十俵や三十俵は送つて宜がら、是非置いて下つせへ、是非願へてへもんでがす」

萬「何うも困りますナ……無暗むやみに置いてくれなんと仰おつしやられては……」

◎「何どうか是非ぜひねが願ねがひたいもんで……」

△「私わし等らも是非ぜひねが願ねがへます」

其そのうちうちに往來おもてが、ワツワイくくと騒さわぐしい」

萬「何なんだ……何なんだ……」

●「チャツと御免ごめんやす……」

萬「ハイ、誰人だなたで……」

●「私わしア鴻池善右衛門かづのいりぜんゑもんの手代てだいでおす……旦那だんなはんが、此方こつちやの福徳屋ふくとくやはん

は……、大層おほらい慈善家じぜんかやと承うけたまはりまして、是非ぜひお結交ちかづきにあがりた

い……就つては土産みやげの印しるしに、聊いささか金かねをさし上あげたいと、只今ただいま千兩箱ちやうばこ

を車くるまへつけて参まゐりました……、何いづれ兩三日りやうちのうちに、旦那だんなはんが

参まゐります」

萬「困こまりますナ……人ひとの家うちへ理不盡りふじんに金かねなど持もつて來こられては……」

×「御免ごめん下さい」

萬「ハイ、誰人だなた」

×「手前てまへは三井八郎右衛門らうゑもんの手代てだいでございます……旦那だんなさまは、大だいの御慈ごじ

善家ぜんかと承うけたまはりまして、是非ぜひしゆじん主人しゆじんがお結交ちかづきにあがりたい……兎うに角かく

聊いささか金きん子を土産みやげの印しるしと、只今ただいま車くるまにつけて参まゐりました……、何どう

か御受納ごじゆなふ下さいまし」

萬「何どうも困こまりますナ……然さり理不盡りふじんに金かねを持もつて來こられては……」

×「アはございませうが、旦那だんなさんが御承知ごしやうちがないと……使つかひに参まゐつた手

前まへが困こまりますから是非ぜひ御受納ごじゆなふを……」



萬「困りますナ」

×「マア、宜から積みあげて……旦那はんが御承知やよつて……ズツと此方へ積み込んで……」

萬「承知も何もしやアしません」

車でもッてドン／＼曳き込んで来る」

夫「エン、ホイ……エン、ホイ……エン、ホイ……」

萬「戯談ヂヤアない、此リヤア驚ろいたなア……其んなに可けません……」

……持つて来たッて……夫れヂヤア、私しどもの坐るとこもない……

弱ツたなア……マア婆アさん、詮方がねエ……彼方の浴室の方へ行

かふ……ナニ浴室も一ばい、臺所も一ばいだ……夫れヂヤア坐

るところがない……」

婆「下の坐敷は、何處もかも一ばいですよ」

萬「ヂヤア詮方がない……二階へ行かう」

婆「マア何うしたら宜いでせう」

萬「何うしたらッて、何うも斯う理不盡に千兩箱を……何處もかも積み

上げて……何ほ何でも寝るとこも有りやアしない……詮方がない二

階へ行かう」

階下に積み切れないで、今度は二階へドン／＼持つて来る」

婆「然うは這入りませんよ……夫れぢやア妾しどもの寝るところがない、

ネエお前さん」

萬「婆さん……ナニ最う其方も塞がツたか……エー詮方がない」

物干地へ出た、

萬「何うも弱りましたナ」  
 庭の方も皆な一ぱい千兩箱で、樹木も見えないくらゐ……築山の頂上が  
 少なし見えるばかりだ、モウ二階坐敷へも置きどころが無くなつてしまつて  
 物干場まで積みあがる、

萬「夫れザヤア可けません、お前さん……何うも仕やうがないナ……」

婆さん千兩箱へ載つて、足を踏みはずしたら大變だ……大家根へ這

つて行かうか……轉がり落ちると大變だ……何うも今夜一晩斯うや

つて、何うにか凌がなけりやア成らない……オ、最う家屋裏へついた

……婆アさん何うも仕やうがないナ……」

婆「真とに何うも、仕やうがないネエ」

萬「何うも困つた……ア困つた……寶船やアイ……」

◎初 幟

桂文治 口演  
 石原明倫 速記

エー申し上げます、元祖立川馬場の作の端午といふ一口咄がございます

○「今年は初節句だが、幟や金太郎や、鐘馗は古い、一つひねつて」

ト左右の幟を、業平に二條の后にして、真中を芥川、上り兜の處

を薬玉、菖蒲、太刀は眞の太刀にして、兜人形は源氏の繪合を飾り、近

所の狂歌師を呼んで、酒宴の處へ、出入の魚屋が来て、

魚「モシ旦那乙な思ひ付きでございます、これで逆もの事に女の子ならば」

トいふこれは考へ落ちでございます、

二代目文治の作で、八百屋が菖蒲を賣つて歩いたといふお話し、

八「菖蒲や〜……菖蒲〜」  
お侍が、

侍「コレ待て〜、其方は乃公の後へまゐつて、大音で勝負〜と申す  
下人に似合はん天晴な奴だ、早速勝負いたして遣はさう、サア」

ト刀の柄へ手を掛けました、八百屋は喫驚て

八「モシ〜、そりヤア貴君の御聞き違ひでございます、わたくしの申した  
シヤウアは、此の籃へは入つてをります 菖蒲でございます、あなたの  
方では、チヨン〜切り合ふ勝負だと思つて、爾うおつしやるんでご  
ざいませう、私しの云ひやうが悪うございましたが、あなたの御聞きや  
うも悪いかと存じます、爾う云ふ似よつたものが幾らもございます、雨  
の降る時に指すのを傘、椀の蓋がかさ、水の上にか、つて居るを橋、御

食を喫べる時に持つのを箸、木について居るのを柿、海にあるのが蠣、  
柱の上にあるのが梁、衣服を縫ふのが針、傘に蓋、橋に箸、柿に蠣、梁  
に針……、菖蒲に勝負は、この間違ひでございます」

侍「面白い奴だ、世界の例證をいろ〜申して……中々下へはおけな  
い」

八「へエそれだから、屋根へあげます」

この通り、昔日は賣つて歩行きましたものでございしますが、當今は賣つてあ  
るきません、八百屋の店前で賣ります、併し昨今大分家根へ御上げなさる  
方がございます、一時雖も五月人形も、すたつて居りましたが、また近  
頃では、流行いたしまして、當年は兩國へ五月人形の市が立つやうな  
ことになりまゝた」

狂歌江戶ッ子は五月の鯉の吹き流し口大きくてはらわたは無し』

江戸ッ兒は口では、豪い中ッ腹を申しますが、腹には悪巧みのない處を、申したものでございませう、或ひは川柳に、

川柳『江戸ッ兒のうまれそこなひ金を貯め』

江戸ッ子は背越しの錢を持つちヤア、先祖へ濟まれへと云つて……、正可方々へ打棄つて歩いた人もございませう』

○『ハイ今日は』

○『オヤ伯父さん入らつしやいまし』

伯『熊は留守か』

女房『ハイ相變らす、遊んであるいて居て困ります、自宅の子供の初節句だと云ふのに、せめてお馬の人形の一個も買つてやるといふ氣もござい

ませんで、夫れでは親の義務が立たない……、犬猫でも子の可愛いと云ふ事は知つてをりますのに……、ほんとに親甲斐もない……それに蔭では人が呑んだくれの熊と、噂をいたします、目の前へ来れば、兄イだとか兄貴だとか云はれるので、皆を連れては先へ立つてお金をつかひます、伯父さんの前でございませう……、兄い兄貴は馬鹿の通り名ではございませんか』

伯『ウム……大方そんな事だらうと思つた……それで已れも今日出て来たのだ、併し却つて熊が居ないのが幸ひだ……少しだからこれといふ程のものも買へないだらうけれど、此處に五圓あるから、これで何ぞ宜さそうな人形買ひな、必らず熊に金を渡しちやア不可い、渡せば直ぐに飲んでしまふが……、曲りなりに初節句の祝ひをしてやれ』

女「チャ爾うでございますか、ハイ有難うございます」

伯「また後に来るから」

女「マアよいぢやアございませんか」

伯「ナニこれから御店へ行かなくちやアならん」

と伯父さんは歸りました、女房は涙をながして、欣んでなりました、處へ、

△「チー阿北」

熊「何を、汝涙ぐんで居るんだ」

女「今伯父さんがお出でなすつてネ」

熊「汝何か小言を云はれたのか」

女「ナニ小言處ではないんです……嬉し涙ですヨ……、實はネお前

さんが飲んで歩く事を咄して、人形が買へないと愚痴を云つたので……

……、伯父さんが……」

熊「伯父さんがどうした」

女「お金を五圓下すつて」

熊「フム左うか其奴ア有りがてへ、己れも方々算段して歩行いて居たのだ

……、工面が出来れへ……、ヤヤアそれをよこしれえ、己れが早速人

形を買つて来よう」

女「アラ何うしやう……飛んだ事を云つたヨ……伯父さんがお前さんに

金を持たせりやア直きに呑んでしまうから、決して云ふなとおつしやつ

たんだ……嬉しいのでうっかり喋つてしまつた……イエ私が行

つて人形買つて来ますヨ」

熊「べら坊めエ、乃公だつて一人の餓鬼の初節句だ……大丈夫だ、乃公が行つた方が安い物を買つて来るからナ、そりやア成程胡蘿蔔や午夢を買ふなら汝が上手だけでも、人形なぞア……どう云つてもおれでなくちやアいけん、すぐにいつて来よう」

女「然けどもネエ……そりやア大丈夫ですかネ、また途中で吞んでしまつちやアいけませんヨ……、ネエお前さん」

熊「執拗な、黙つて留守番して居れ」

とツイと表へ飛び出しまして、急ぎ脚でまゐりますと、或小料理屋の二階から、

△「兄イ〜」

熊「チー八か」

八「チヨイと上つてお呉んれえ」

熊「乃公ア今急ぎで行くんだ」

八「マ、一寸あがつてお呉んれえ、手間ア取らせません」

と云はれるので、二階へあがりました、

八「時に兄イのお出でが遅いから、今お前さん處へ呼びに行うと思つたんだ、此間の一件を今日笑はしてしまはうと思つて、

熊「フム、爾うだつた……、すつかり忘れちまつた……、ヤイ彌太や、惣吉、これからあんなぐたられえ喧嘩アするない、友達の中で」

八「兄イ、ネエ兄イ、彌太や惣吉は巡查を恐れれえでいけれえ……、横町の兄イが一言云やアそれで、此奴らア少さくなつちまふんだ」

彌太「まことに濟みません」

惣吉「是れからモウ決して」

二人「御厄介にならんやうにいたします」

八「兄イ一つ始めてお呉んなせへ」

熊「何だ食物も祿に……爾う云はないか、外聞がわるいや、ドシ〜爾う云へ」

これから一つ呑み、二つ呑み、段々酔つてしまひました、

熊「八ヤ、サアこれ丈手前に渡し置くから、いゝ様にして呉れ」

と四人ながら大酒でございますから、大酩酊、熊は

〇「兄イ〜」

と云はれるので、嬉しがつて、折を提げて自宅へ歸つて來ました、女房は  
見ると大おどろき、

女「マアお前さんは……マア、大變に酔つてお歸んなすつた、人形も買  
はないで、こんな折を提げて仕方がないぢやア有りませんが、伯父さん  
に何んとも云分がありません」

熊「筧棒のエ……實ア自家を先刻飛び出すと、八が兄イちよつと上つてお

呉んれえと呼び込んで、それから彌太と惣吉が喧嘩の仲直りてえんで、

斯う……食ひ酔つたんだかどうだ……其處が江戸子だア、伯父さん

の云分なざア、チヤント胸にあるんだ」

女「何ぞといふと、胸にある〜と、胸にあるのを吐いておしまひなさい」

熊「溜飲ちヤアれえ」

女「今にまた伯父さんがお出でなさるヨ、歸りによろとお云ひなさつたか  
ら」

熊「構ふこたアねえ、うるせえや」  
と其儘高野雷、處へ夕方に伯父さんが來ました。

伯「チイどうした」

女「チヤ先刻は有りがたうございました」

伯「熊は寢て居るナ」

女「聞いて下さいまし、貴郎が御歸んなさると、直ぐに歸りてまゐりまして  
私しが嬉しいもんでございますから、ツイアノ嘶しをしたら、己れが買  
つて來るから、イエ私しが買つてまゐりますといひましたが、何でも己  
れが買つて來るといふので今日ばかりはまさかと思ひましてネ、お金を  
渡しましたら、途中で喧嘩の仲人には入つたのがで、そのお金を飲んで  
しまつて、先刻折をさげて歸つて參りました、私しが何を云つても笠棒

めエくくくくと、笠棒をふり廻して寢ししまいました……ど  
うぞ伯父さん、起して小言を云つて下さいまし」

伯「マア、アノ金を渡したのか……、あれほど云つておいたのに、飛んだ  
事をしたナア」

女「今日ばかりは、ヨモヤ遣つてしまやアしますまいと思ひまして」

伯「仕方がないと云つても居られない、起して小言を云はう……、熊起ま  
ろくくく」

女「チヨイとお前さん、伯父さんがお出てなかつた」

能「ア……コリヤア、どうもよくお出でなすつた、先刻は有りがたうご  
ざいます、お蔭様で初節句が出来ます」

伯「コレ馬鹿にするなエ、乃公がやつた金を酒エ飲んでしまつて、何處で初



節句が出来るのだ』

熊『イエチヤント二階に飾つてございます』

伯『飾つてあるなら見せろ』

熊『ようござへます』

と梯子段をトン／＼と上つて梯子の中央へ留りまして、

熊『モシ伯父さん今朝から始めて二階へ上るんだから、これが初のぼり、お

のぼり／＼、顔は金太郎のやうに赤くても、酔がさめれば鐘馗(正氣)

になります』

伯『なるほど……、洒落で云分をしやうといふのだナ』

熊『へエ、モウ噂アが云ひますには、お前さんは料理屋ばかりで呑まないで

兜の招牌の出で居るところで、お酒をあがるから、あがり兜だと申

します、酒ア飲むかはりに、勝負ことは断つて居りますから、これが葺蒲太刀でございます、忙しいので刈り込みをしませんから、夫窓は毛槍のやうになつてをります』

と云ひながら、戸棚から五布蒲團を出して、グルリとくるまツて、

熊『これが柏餅でございます、天窓が出て居ますが、これは柏餅の餡の

はみ出したのでございます、少しお嘗めなさいまし』

「まるび寢のわれは蒲團の柏餅かわいいといふてさすり手もなし』

伯『ウム……、乃公も何ぞ祝つてやらう』

熊『伯父さん、大きな聲だネ』

伯『この鯉を吹き流しにしる』

## ◎地獄の學校

三遊亭 金馬 口演  
石原明倫 速記

エー此のたび申し上るのは地獄の學校といふお話しでございます、此れは毎度出まする地獄廻りの落語とは、工合が餘ほど異つてゐるやうに思ひまするお慰さみに成るか成らんかは存じませんが、マ、お耳新らしい積りで申し上げるんでございます……日本は總て一六八をもつて割つてある、積つてあるといふことを申します、成るほど然うかも知れませんが……一は萬物の始まりと言つて、何かに附くものでございします……八は物の數の多いところへ使ひます……六は積りものに用ひます……一寸とお早いお話しが、六尺を一間と言ひ、六尺四方が一坪、六十間が一町、六六三十六町が一

里でございします……是れば手前どもが申し上げませんが、皆様が先刻御承知でございします……又た佛道にも大分六が使つてございします……六阿彌陀、六地藏、六道の辻などといふのが有ります……此の深川の六間堀に、紺屋の六兵衛といふ人が有りました……職業ものに使ふ緑青を、酔つた紛れに、過失まつて服用いたしました……是れが原因でトウ、死んでしまひました……地獄へ行つて氣がつかしました、少こばかり氣の付きかたが遅うございしました。

六「エー、ハテ否やに暗いところへ出て来たが、此處は何處だらう……向ふに六道の辻としてあるぞ、六道の辻といふからは、青山だらうか……己れば青山へ用があつて来たわけがない……ア、然うだ、昨夜死んだのだ……夫れヂヤア此處は地獄の六道の辻か、飛んでもないところ

ろへ出て来てしまつた、此處に追分の杭がある……ナニ是れより地獄道極樂道、右とか左とか書いておいて呉れさうなものだ……ハテナ向ふへ人が行くが、赤い衣服を着てゐるやうだぜ、頭に毛がねへや、ア一坊さんだ……緋の衣を着てゐるんだ、彼の人に聞いて見やう……モシ其處へ入らツシヤいます御出家さまへ……和尙さまへ……方丈さんへ……坊さんへ……』

坊「ア一此れは、お呼びになつたのは愚僧のことで……何ぞ御用でござりますか』

六「エ一少々お願ひがござります……私しは現世にをりまする時は、深川六間堀で緋屋渡世をしてをりましたる、一名正直六兵衛と申するものでござります……昨夜當所へ参りましたが、土地不案内で道が一向

別りません……貴君は御出家で入らツしやいますから、極樂道を御案内でございませう……何うぞお導きを願ひます』

坊「是れは、何ごとのお頼みかと思つたら、愚僧に極樂へ導びいて呉れとのことでござるが……愚僧とても現世に成ることなれば、有りがたい經文を唱へて極樂へ遣つてやれんといふことも無いが、愚僧も冥土は今日が始めてある……如何なる經文を讀んだら、お前が極樂へ参るか、其の程は頼と分らん……何しろ悪くは致しませぬゆゑ、愚僧と同道なざるやうに……』

鬼「ア一此りや、其方どもは何れへ参る……此の所は、冥府國地獄裁判所、閻魔大王さまの御前であるぞ』

坊「是れは閻魔大王の御前とも知らず推参をいたしました……愚僧ことは

南瞻部州、大日本東京府下浮世村、農民甚兵衛の悴、甚之助と申す  
るものでござる……圖らず今日御當所へ罷り越しましたる間、極樂  
へお導びきを願ひたい』

判「坊主面を上げる……ヤ其方は、極樂といふ人體でない、地獄の罪人だ  
坊何と仰しやる……一人出家する時は、九族天に生るといふ……」  
判「是れく坊主、喧ましいことを申すナ……赤鬼、坊主を、淨瑠璃の鏡

へかける……」

映けて見ると驚ろいた……坊チヤン緋の衣も何も投げ出してしまひ、後  
ろ鉢巻ザンく端折りで、ステ、コを踊ッてをります……傍には藝妓が三  
味線を探り、料理が澤山出てゐるところが寫ります……是れを見てゐた六  
兵衛さんが驚ろいた、

六「へエく、地獄のお役人様がたでござりますか……私しは此の坊さ  
んの同類ぢやアござりません……ツイ其處で道連れになりました、深  
川六間堀に住してをります、染屋渡世の六兵衛と申します大の正直  
者でござります……生れおちて以來、虚言といふものを、一向吐いた  
ことがござりません、モウ佛六兵衛、正直六兵衛と、世間の人に申さ  
れてをります……私しだけは極樂へお願ひ申します』

王「ア、此りやくく六兵衛……閻魔大王が直に問ひ糺すぞ……其方決  
して虚言を吐かんと申すか……其方のところへ人々が、染物洗ひ張  
物を持って参り、親方此れば何日ごろ出来ますと言ッたら、何日と申す  
……明後日と申すではないか、紺屋の明後日は虚言ではないか」  
六「誠に恐れ入りますので……」

傍にりました十大王の一人、

○「アイヤ、閻王どのへ、一寸と申し入れたい……成るほど六兵衛が、明後日と申するは、虚言には違ひないけれど、是れは商業上手といふもの……人々が染物を持ッて参ッて、十日かゝる、二十日かゝると申すと、諸人本意なく思ふ……然處で然やう申したのであらう……失れに地獄館も、當節は大分疲弊いたして、アレ御覽じろ……赤鬼、黒鬼、青鬼の服も、大分色が變ッて参ッた……デ、六兵衛の参ッたを幸はひ、是れを染め替させやうではござらんか……其の上何とか手前が所置をつけます……暫時此方へお預けを願ひたい」

王「然らば、判官どのへお預け申す」

判「此りや、六兵衛……只今大王さまへ願ひ、其方を極樂へやッて遣

はす……兩三日地獄館に滞留をしてをッて、其方職の染物をおたしてくれ」

六「へエ、極樂へ遣ッて下さいますれば、手前渡世でございますから、染ものぐらゐは致しまする」

判「此りや六兵衛……新亡者が参ッたから、其方彼方へ控えてをれ……

ア、此りや、其處へ行く亡者……何れへ参る」

△「何だ、何を吐しやアがるんだ……何處へ行かうと己れの隨意だ、地獄の往來を己れが歩行くんだ、不思議があるか」

判「其方此處を何處と心得る……地獄裁判所閻魔大王さまの御前だ」

△「ア、然うか……此いつア濟まれエ……地獄の親分、閻大の前か……堪忍してくんれエ……へエ、初めてお目にかゝりやす私ちはがらッ

八と言つて、我雑なもんでござへやす……昨夜同業の奴等と喧嘩して打ッ殺されて此處へ來やした……地獄へとこア子供の時分から、虫が好かれへんでござへやすから、極樂へ遣ッてお呉んれエ」

王「ア、此りや、見る目、嗅ぐ鼻……此奴は何者である」

見「ハッ……只今本人の申する通り、がらッ八と申して、博奕を渡世にしてゐる、良からん奴でございます……極樂どころではござらん、地獄の大罪人……」

の

八「何を吐しやアがるんだ、見る目、嗅ぐ鼻……高へとこで、ピカアリくく光りやアがッて、己ら鐵道の目標と間ちげへた……此の青鬼も、人の前へ突ッ立ちアがッて、何を白眼めやアがる……迷子く爲やアがると、横ッ腹ア蹴破ッて鐵の棒を突ッ通し、鬼の附け焼をこし

れへ、縁日へでも持ッてッて、賣るから然う思へ」

鬼「大王さま……何ういたしませう」

王「構はないから、打れ」

鬼も思々しいから、鐵の棒で打りつけますと、打ちどころが悪かつたと見え、急處でも打ッたのか、忽ち打ち生してしまひました。

王「此りや、ナゼ然やうなところを打ッ……急處を打ッたのであらう……折角死んで來たものを、蘇生がへらしてしまッた……是れだから地獄が暇で致かたがない……跡を氣をつけるくく」

鬼「此りや、其處へ行く亡者……其方何者だ」

耶「僕は耶蘇信者である……シテ御當所は何れでござるか」

鬼「冥府國地獄裁判所である」

耶「ヤ、夫れは丁度宜かつた……何うぞ極樂の方へ、お導きを願ひたい」  
 鬼「其方、耶蘇信者だ……夫れでは極樂へは遣れんツ」  
 耶「ナゼ極樂へ遣れんか」

鬼「耶蘇信者といふ者は一婦を守つてをツて、神佛を麗末にする……極樂は佛の國であるから、夫れで遣ふことはならんといふのだ」

耶「ヤ、然らば大王さまへ何がふ……僕は耶蘇信者に違ひない、然れども大の佛信家である……生れ落ちた其の日から今月今日に至るまで  
 の觀世音へ、日に三度づつ參詣をいたしてをる程の佛信家でござる」

王「ナニ、淺草の觀音へ、生れ落ちた其の日から、今月今日まで參詣した……シテ母に抱かれて參つたか、父に背負はれて參つたか」

耶「イ、ヤ、僕が一人で……」

王「生れた其日から、其方一人で何うして參れる」

耶「ヤ、お尋ねならお話を致さう……昨年七月の十日朋友と共に遊廓の戻り、淺草寺の境内を通りかゝると……彼方には、赤き蜀黍を商なひをり、此方には千なり酸漿を賣つてをる……依つて其の時に聞およべば、今日は四萬六千日と申して、今日參詣をすれば、四萬六千日參詣をしたに報う、斯やう申されました……然處で僕が其の日に參詣をいたした、當年經て四拾貳年三日に相成る……ソマテ此の四萬六千日を割賦して見ると、日に三度に當るかと思得る、算盤の達者な者が有るなら彈いて見い」

王「ア、此りや此奴が悪いのではない、淺草の觀音が悪いのだ……此りやく黒鬼、淺草の觀音のそこへ電信を打つて、此方へ來るやうに

申し付けろ』

ヤ、観音さまは驚ろいた、地獄から電信がかゝつて来たによつて、四天王のうち、廣目天をお呼び寄せになり、

観「ア、此りヤ、廣目……只今地獄の閻魔のところから、電信が通つて来たが……先方は大男、己れは一寸八分だ、迎も應對が出来ない誰れか代言を遣はしたいナ、何うちや仁王では……」

廣「お言葉ではございますけれど……仁王は身体は大きくございませるが、一寸八分の貴君が、拾八間四面のお堂に這入ッて入らッしやる、其の門番を言ひつかるくらゐでございませるから……代言なぞは、迎も思ひも寄りません……エー幸はひ三社のうち、兄濱成をお遣はしに成りましたら宜しうございませう』

観「ア、或るほど、是れは宜いところへ氣がついた……然らば濱成を遣はせ』

爰で濱成が観音さまの代言で、地獄へ来ることになりました。

鬼「此りヤ、其方は何ぢや』

濱「金龍山淺草寺観世音代言濱成にございませる』

鬼「ア、夫れなら直ぐ大王さまの御前へ出る』

王「此りや濱成早速に問ひ糺す……七月十日を以て四萬六千日といふ布令を出だした覺えがあるか』

濱「然やうなことを世俗に申しまするが、観世音より布令は出しません』  
王「出さんければ、ナセ差し止めん……事の序でに問ひ糺す……本堂の額の内、淺茅ヶ原一つ家の額がある、傍を見ると、



「行きくれて野には臥すとも宿借るな、淺茅ヶ原の奥の一家」

トいふことが掲出てゐる、彼れば何ぢや……聞き及べは、淺茅ヶ原の老婆が宅へ、旅人が九百九拾九人といふ者泊つて殺害され……千人目に觀世音が化身をいたして参り、老婆を改心させたといふではないか……併し人助けに出るならば、一人殺されたらナせ直ぐに参らん……夫ればかりでは無いぞ、橋場長昌寺の事件があるぞ……此れは天保年間、脇坂淡路守の調べにより相濟んでなれば、此の度のことは差免す、以後は免さん退りませい」

イヤモウ觀音さまも、閻魔さまにあつては能ひません……斯う云ふ體裁でございまするから、六兵衛さん面白くつて堪らない、

六「エーモシ、お閻魔さまへ……地獄は餘ほど面白いものでございます

る、私しは生涯此方へお使ひ下さいますまいか」

王「六兵衛、馬鹿を申せ……地獄で人間を雇ふことは出来ん……ア、是れく黒鬼や、其の金庫の中に六道錢がある、一枚是れへ出せ」

頓て黒鬼が合鍵を持つて、ガチャ／＼と金庫を開けて、六道錢を大王へ上げる

王「六兵衛……是れを持つてナ、是れより四五町行くと、三途川橋といふのがある……其處を渡ると、向ふは賽の河原といふのだ、是れば盛り場で、極賑やかなところであるから、其處へ参つて遊んで来い……劇場もあれば寄席もある、食物店が何なりとも出てゐる……併し地獄の錢といふものは、何れを觀ても何を食つても、只だ見せさへすれば宜いのだぞ……決して元錢を渡しては成らん」

六「へエ、有りがたう存じます……然さうなら、一寸と行つて参ります」

是れから六兵衛さん喜んで出かけた。

六「アー地獄といふところは調法なところだ……ナール程此處に立派な

橋がある……三途川橋、永代橋と間違ひさうだ……ナニ橋銭か出

る、恐い婆アが橋番をしてゐやアがる……アー是れが庄塚の婆アだ

ナ……」

閻魔さまに教はつたから、六道銭を出して、

六「お婆さん、ソラ橋銭を見せるよ」

ト橋を渡つた、

六「オ、く成るほど賑やかだ……ヤア立派な劇場がある、ナニ

賽の河原崎座、坐頭は誰れた……坂東彦三郎、中村芝翫、助高屋

高助、岩井半四郎……向ふにも有るぞ、線香座と……俳優は誰れた

瑞寛、宗十郎、多見藏、雀右衛門、此りヤア上方劇場だ……此處に

寄席があらア、晝間が講釋、夜が色もの……晝間は誰れた、陵潮、

桃林、如燕……夜が今輔、圓大郎、燕枝……ヤア地獄へ斯ういふ

宜い藝人が皆んな来てゐるんだ、婆婆に少なくなるなア無理はねへや……

イヤア彼處に、煉化造りの立派な家がある、オウ、小供が出て来た

く……何だい此りやア、腹掛一つのもあれば、袖無一枚のも

ある……賽の河原學校と、アー學校だ……オヤ教師が出て来たぜ、

汚れへ面アしてゐやアがる、石の地藏さまだぜ……賽の河原の地藏さ

まも、子供を預かるのに學校を開いたんだぞ、地獄も開けたなア……」

地藏「サア、皆さんや、遊歩が濟んだら授業にかゝるのですよ」

ト言はれて皆な教場にクラ、這入ります、頓て地藏さまの教師は白墨を

もツて、黒盤へ何やら書きました、書てしまふと二尺ばかりの細い棒をもツて、

地「是れからお読みですよ……お腰をかけて、お膝へ手をつけて……字

突の先きを御覽なさいよ」

六兵衛さん窓へ掴まって内を覗いて、

六「ナニお読みだツて、地獄のお読みたア面白へ、娑婆の土産……ト云ツ

たても生れ替らなくツちやア可ねへんだ、エ、構はれエ聞いて行け」

地藏さまの教師が言ふ、其の通りに一同の生徒が言ふ、

地「サア宜いかれ……八萬奈落國盡」

生「八萬奈落國盡」

地「抑も地獄の数々は」

生「抑も地獄の数々は」

地「一百三十六地獄」

生「一百三十六地獄」

地「あまねく人の聞き知るは」

生「あまねく人の聞き知るは」

地「阿鼻獄、墮地獄、阿鼻焦熱」

生「阿鼻獄、墮地獄、阿鼻焦熱」

地「熱鐵地獄、修羅地獄」

生「熱鐵地獄、修羅地獄」

地「凍渴地獄、針の山」

生「凍渴地獄、針の山」

地『路傍ちこく、旅ちこく』  
 生『路傍ちこく、旅ちこく』  
 地『淫賣ちこくの常として』  
 生『淫賣ちこくの常として』  
 地『月に七日の血の池も』  
 生『月に七日の血の池も』  
 地『皆な切り賣にするぞかし』  
 生『皆な切り賣にするぞかし』  
 地『應頼藝妓の水轉も』  
 生『應頼藝妓の水轉も』  
 地『見る目、嗅ぐ鼻拘引し』

生『見る目、嗅ぐ鼻拘引し』  
 地『皆な夫れくの律に當て』  
 生『皆な夫れくの律に當て』  
 地『處刑は拘留一週間』  
 生『處刑は拘留一週間』  
 地『又は壹圓過料金』  
 生『又は壹圓過料金』  
 地『拾圓以下の旦那取』  
 生『拾圓以下の旦那取』  
 地『淫賣ちこくと見做すぞや』  
 生『淫賣ちこくと見做すぞや』

地『極樂世界へ行きたくば』  
 生『極樂世界へ行きたくば』  
 地『浮き川竹に身を沈め』  
 生『浮き川竹に身を沈め』  
 地『五光に飾る 簪の』  
 生『五光に飾る 簪の』  
 地『歌舞の菩薩になれよかし』  
 生『歌舞の菩薩になれよかし』  
 折りからカン／＼／＼／＼（鐘の音）  
 地『ア、無常の鐘が鳴ったよ……お茶湯が上ったから、枕飯に仕やう』

◎幽霊車

三遊亭圓左口演  
石原明倫速記

幽霊といふものは無いものだと申します、此れは神經病だと申します、神經病とは唐の鷄だらふと心得てをりますが、彼れは金鷄鳥ださうでございます……エー其の古しへ吉原の五十軒に、上總屋何某といふ好色家がございまして……此のお方が、玉星の玉里といふ傾城を身請をいたしまして、根岸の方へ圍つて置きました……スルト女房さんが、妻『己れの亭主を寝取りやアがって、口惜いから祈り殺さう』  
 トいふので一心不亂に祈ります……スルト玉里の方でも、  
 玉『妾の方には、然ういふ心もちはないのに、妾を祈り殺さうといふなら

此方が祈り殺してやらう』

ト又た一心不亂に祈ります……ト兩方其の念が通じたか致しまして、同日に兩人とも死去いたしました……儲て葬式を済ませますと、其の晩からいたしました、毎夜吉原の方から、フワク／＼／＼大音寺前へ火の玉が飛んで参ります……又た根岸の方からも、フワク／＼／＼火の玉が飛んで参ります……丁度此處んところで、火の玉と火の玉が打付かりあふ……サア此れが近所の評判になりましたから、主人が寺へ出掛けてツて、

主「ア、和尚さま、此れ／＼斯ういふわけでござります、何うか一つ貴僧、是れを浮ばして下さい』

ト和尚に頼みました、スルト或る朝、

○「エー御主人、私は貴君が言ふ通り、昨夜大音寺前まで行きますと、根岸

の方から火の玉が来た、又た此方からさして火の玉が参りました……暗の夜で少とも姿が分らんが、何かお互ひにゴテ／＼／＼言ふと容子……テ私が斯う透かして見ると、暗の夜に行きあたるものと見えて、幽霊の額に瘤がありました、私の考がへでは、怨みの念はコブ／＼やといふ考へで……就てマア何方も夫れ者の果ぢやからして、貴君は今宵は大音寺前へ行ツて、幽霊に能う説得をしなさい……私が可愛いと思ふなら、お互ひに中よくして、然うして姉妹同様になツてくれ、其の上で又た有りがたい經文を唱へて貰ひ、成佛得脱するといふことにしたら何うだと私は思ひます』

主「眞とに何うも有りがたう存じます、夫れでは今晚は大音寺前へ参りませう』

其の夜大音寺前へ参つて主人が待つてをりますると、根岸の方からフワ／＼火の玉が参りました……早速話さうと思ひましたが、片相手が参りませんから、腰から煙草入を出して、彼の火の玉で火をつけて、煙草を吸んでをります……スルト又た五十軒の方から、フワ／＼／＼火の玉が参りました、傍へ近づきましたので、

主「オイお前の来るのを先刻から待つてゐた、實は私しが今までは悪かつたが、何うか又た悪いところは、私が謝るから堪忍して下さい……兩人とも何も讐敵といふわけでもなし、怨みなんてへことは、スツカリ私にめんじて堪忍しておくれ……第一マア世間體が悪くつて可ん、ところで姉妹同様此れからは中よくして貰ひたい……就ては有りがたい、和尚さんへ頼んで、お經を讀上て貰ふから、夫れを功として今ま

でのことは、水に流して貰ひたい』

又た煙管へ煙草を詰めて、彼の女房さんの火の玉で、

主「チヨイと火を貸してくんれエ』

チヨイと移やうとすると、女房さんがスワーツと起つて、

妻「妾ので移たのでは御意に入りますまい』

洒落た幽霊です……是れは全たく有りましたお話しでございます……エ

一爰に九段下の畑橋を、二人乗りを曳いた車夫さん、顔の青い鼻のツン

と高い瘦せた車夫でございました、乗つて一人の客が、

○「オイ車夫さん、赤ん兒が泣くやうだれエ』

車「へエ、泣きますよ』

○「泣きますと言つて、何處で泣いてるんだれエ』

車「へエ、私しの懐中です」

○「お前の懐中だ……モウ點燈時分で薄暗へから、氣がつかなくつたが、お前赤ん兒を抱いてゐるのか」

車「へエ」

○「夫りやア大變だ……マア待ちねエ、此れから登りになるんだ、彼處の

富士本といふ氷店へ寄つて、氷を飲んで行かふぢやアないか」

△「宜からう」

○「チャア車夫さん、下してくんねエ、チヨイと氷を飲むから」

車「へエ」

其處の氷屋へ這入つて腰をかけた。

○「車夫さん、お前何だつて人力車を曳くの、赤ん兒を抱いてゐるんで

す」

車「へエ、是れには種々仔細があるんです」

○「仔細がある……何したんだ」

車「へエ、旦那何うかお聞きなすつて下さい……私しは先々月家内に死に別れまして……」

○「フン……フン……フン……」

車「モウ三月ばかり煩らつてをりましたんでございますが、エー死亡しまする

際に家内が、妾が死んでしまつたら、定めし子供が乳を飲むに困るだらふ……乳がないから定めし困るだらふと、家内が申してをりました」

○「フン……フン……フン……」

車「私しがいふには、其んなことを心配しねへで、早く身體を癒さなくつ



ちやア可いれエ……ト申まをしますと、イエ何どうしても此こ度は助たすかりません  
妾わたしが死なく去くなツたら、不ふ自じ由いうだから女房おかみさんを持もつてせうが、只ただだ子こ供ども  
を其その女房おかみさんに、窘いじめられてもすると可か愛あいさう……夫それが心こころ残のこり  
で何どうしても死しなれないと申まをします』

○『フン……フン……フン』

車そ『其そんなことはねエ……子こ供どもの太おほくなるまで、女房にようはうは決けして持もたれ  
へから、心配しんぱいしれへでくれと家内かないに申まをしました』

○『フン……フン……フン……』

車そ『夫それやア何どうか、貴君あなた丹精たんせいして下くださいよ……マア其そんなことア有あり  
やアしれへが、萬まん一いつのことが有あつたつて、子こ供どものことは決けして心配しんぱいしれ  
へが宜いい、何どんなことでもして育そだてる』

○『フン』

車そ『夫それで妾わたしが行いくところへ行いかれますよ……夫それが此この世よで別わかれで、  
トウ／＼家内かないが死しにました』

○『フン……夫それは氣きの毒どく千萬……』

車そ『夫それから葬さうじ式しきを出だしたいにも、貧乏びんぱん人にんでございますから……其その晩ばん  
は、屍骸しがいの傍そばへ子こ供どもを置おいて寐ねかしますと、旦那だんな聞いてお臭くんなさい……  
其その死し人にんの乳ちゅうを、此この子こ供どもが吸すつてをりますんで』

○『フン……フン……フン……可か哀あいさうに何どうも……』

車そ『夫それから葬さうじ式しきを出だしました、其その翌よく晩ばんのことでございますナ』

○『フン……』

車こども『子こ供どもがヒツシと泣なきますから、乳ちゅうがないからマア、乳ちゅうの粉こなを買かつて來きて

紙しやぶらせましたり何か致いたしますけれど……乳ちゅうの無なき男おとこの手て一つでは、  
何どうすることできも出来でません』

○「フン……」

車こども「子供なが泣ないてをりますと、彼あれが夜よの二時じごろでもございましたらふか  
……不圖ふと氣きがついて見みますと、家内かないが私わたしの枕元まくらもとに坐すわつてをりま  
す』

○「オイ車夫くるまやさんくく、戯談じやうだんぢやアねへせ、只今いまお前まへ大魔おほまケ時ときと言いッ  
て、今時いまじ分ぶん其そんな馬鹿ばかなことを言いッて……其そんなことは氣きの性せい、夫そり  
やママア神經しんけい……エーオイ……」

車こども「イエ夫そりヤ全まったくなんで……」

○「フン」

車まへ「お前こどもさん子供なが泣ないて困こまりませうナ、乳ちゅうがないから定さだめしお前まへさんが困  
るでせうが……若もし子供こどもが泣ないたら、妾わたしの着きがへの單衣ひとへものを、上うへ  
覆かけてやッて下くださいと家内かないが申まをします』

○「フン……フン……フン……」

車そ「夫それから怪けう有あなことが有あるもんだと思おもひましたが、然さうすると泣なき止やみ  
ます、止やんだかと思おもふと妾すがたが消きえてしまひました……夢現ゆめうつのやう  
で、ハテ妙めうなことが有あるもんだ、物ものの試ためしに家内かないの浴衣ゆかたを斯かう小兒ここれの上  
へかけてやりました』

○「フウーン……」

車あなた「スルト貴君あなた、不思議ふしぎにも此この赤兒あかこが、ピシヨくくく口くちを動うごかしま  
して、頓どんと乳ちゅうを吸すッてゐるやうな丁合ぐあひ……スヤく寝入ねいります』

○『モウ宜いや車夫さん、分つたよ……モウ止しねエ、其んな話しは止し  
ねエ』

車『マアお聞きなすツて下さい』

○『驚ろいたなア、夫れから何うした』

車『夫れから私しが看護疲れて、始終加減が悪くツて、二十日ばかり休  
んで……銭は一文なし、食ふことも出来ず、子供に甘酒一つ買ツて  
飲ませることも出来ません』

○『フン』

車『據どころなく私しが、此の病あげくに二人乗りを引張ツて歩きます  
んで……』

○『夫りやアマア氣の毒だなア』

車『夫れでも旦那、私しどもの家内は實に何うも豪い奴で……』

○『フウン何で……』

車『其の平地は然うでもございませんが』

○『フン』

車『山坂になりますと、却ツて樂でございます』

○『車夫さん、分らないぢやアないか……お前も病氣揚句、夫れを山坂  
になると、樂になるてへのは何ういふわけだ』

車『夫れが家内が跡押をしてくれます、ですから山坂にかゝツて樂でござい  
ます』

○『へエー』

車『ですから私しのことを、近所の者が、彼れは幽霊車と申してをりま

す

○「車夫さん、モウ宜いよ……、お前、錢をやるよ……アー聞けば聞くほど氣の毒なわけだ……ちやア此處に五十錢あるから、是れをお前にやる、人力車ア最う宜いよ」

車「戯談言ッちやア可ません、五十錢頂だいて只今乗ッたばかり、其んなことを仰しやらずに……」

○「宜いよお前にやるんだ」

車「やるツて、是れから先きは坂にかゝりますんで……跡押がございいますから、却ッて山は樂ですからお乗んなすツて……」

○「乗らなくツて宜いよ……お前如何にも氣の毒だから、五十錢やるから何の足しにもなるめへが、女房さんに線香の一本も備てなりしてやツて

呉んれエ

車「有りがたうございいます、お影さまで助かります……今日は私しは一文なし、五十錢下さいますツて、助かります、有りがたうございいます……」

……「タガ夫れでは私し冥利が悪い、切てモウ少し……」

○「モウ少しツたツて、宜いよ是れで……マア氷を飲んで行きれエ」

車「有りがたうございいます」  
ソコ〜にお錢を拂ひまして、氷屋へ錢を置いて、兩人は精々と駈け出しましたが、麴町の通りへ駈け通しちゃった……暫時立ち止ツて後先兩方を見、ホツと息をついて向ふへ歩行きながら」

○「何うしたエ」

△「何うも驚ろいたなア」